

発掘された南丹波地域の歴史

—近年の調査成果から—

1. 古代・中世の土地開発

むろはしいせき のじょういせき
—室橋遺跡・野条遺跡ほかの調査から—

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 高野 陽子 P 1 ~ P12

2. 戦国時代の城から江戸時代の城へ

さんのみやひがしじょうあと そのべじょうあと
—三ノ宮東城跡・園部城跡ほかの調査から—

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 引原 茂治
加藤 雅士 P13 ~ P32

3. 南丹市内の城館跡

おやまやかたあと
—小山館跡ほかの調査から—

南丹市教育委員会 辻 健二郎 P33 ~ P42

日時：平成 24 年 6 月 30 日（土）午後 1 時 30 分～4 時 30 分

場所：南丹市園部公民館 大研修室

主催：京都府教育委員会

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

後援：南丹市教育委員会

古代・中世の土地開発

むろはしいせき のじょういせき
一室橋遺跡・野条遺跡ほかの調査から一

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

調査員 高野陽子

1. 古代の耕地開発前史～縄文・弥生・古墳時代の営み～

南丹市八木町の東部（川東地区）では、平成10年度以来、府営ほ場整備の対象地区の発掘調査が実施されてきました。調査された遺跡には、池上遺跡・野条遺跡・室橋遺跡・諸畑遺跡・大谷口遺跡・新庄遺跡などの多くの遺跡があり、縄文時代から室町時代に至る各時代の遺構がみつきり、大きな成果が得られました。以下にその概略を紹介します。

縄文時代 諸木山山麓部では縄文時代の生活の跡が確認されました。大谷口遺跡では縄文時代後期（紀元前2千年頃）と推定される溝や土坑がみつきり、室橋遺跡ではメノウ製の石鏃が出土しました。

弥生時代 池上遺跡は、弥生時代中期（紀元前2～1世紀頃）の大規模な集落であることが明らかになり、多くの竪穴建物や方形周溝墓と呼ばれる低墳丘の墓からなる墓域、さらに集落を囲む環濠の一部と推定される溝がみつきりました。池上遺跡の弥生集落は、南丹波でも有数の規模をもつもので、地元の粘板岩製の石材を用いて石包丁や石鏃、石剣など、様々な石器を製作し、遠隔地との交易によって得た碧玉を素材とした管玉の製作を行っていたことがわかりました。また野条遺跡では、弥生時代後期後葉（2世紀後半）の竪穴建物が発見され、北陸から運ばれた土器や、鉄鏃が出土しています。野条遺跡の西部では、再掘削を繰り返した灌漑用水路とみられる溝群がみつきっており、弥生時代後期から古墳時代初めに大きく展開した集落であることがわかりました。室橋遺跡では、深さ2m以上に掘削された溝が約50m以上にわたって確認されました。この溝は、台形状の断面形をもつ深い溝で、丸木舟などの航行も可能であったと考えられます。北西に直線的に延びると考えられることから、大堰川本流付近から導く大規模な水路となる可能性があります。溝からは後期後葉～古墳時代はじめの若干の土器片が出土しましたが、埋土や炭化物の放射性炭素年代分析では弥生時代中期の年代が出されています。

古墳時代 室橋遺跡では、前期前葉（4世紀前葉）に埋没したとみられる断面「V」字形の大規模な溝が確認されました。また諸畑遺跡では、古墳時代中期（5世紀）初めの

渡来系の系譜をもつ板石を用いた竈を付設した住居がみつかりました。近畿地方で最も古い時期の竈です。古式の竈を伴う住居は、5世紀中葉には大谷口遺跡や室橋遺跡南部にも広がり、集落の規模が大きく広がったことがわかりました。さらに、古墳時代後期（6世紀頃）には、室橋遺跡の南部や新庄遺跡でも竪穴建物群がみつかりしています。

以上のように、弥生時代から古墳時代にかけて各時代の遺構がみつかりましたが、なかでも弥生時代中期（紀元前2～1世紀）、弥生時代後期～古墳時代初頭（2世紀後半～3世紀前半）、さらに古墳時代中期（5世紀）に集落の規模が拡大し、大きく開発されたことが明らかになりました。

2. 奈良時代～平安時代初期の開発

八木町東部を対象にした今回のほ場整備の調査では、奈良時代～平安時代にかけて繰り返し耕地開発が行われ、縦横に水路が掘削されたことがわかりました。地域の耕地開発の歴史と発展を考える上で、大きな成果が得られました。

耕地開発に関わる水路が最初に整備されるのは、奈良時代～平安時代初期と推定されます。奈良時代～平安時代初期には、室橋遺跡の北部や南部、さらに野条遺跡の北部で最下層に礫層が堆積した灌漑用水路とみられる溝を各所で確認しました。これらは、幅1～1.5mと平安時代後期～末期のものに比較して小さな規模ですが、室橋遺跡から野条遺跡にかけて、広いエリアで開削されたと考えられます。

また、室橋遺跡では、大規模な掘立柱建物群が北部の2か所でみつかりました。そのうち室橋地区中心部を流れる現在の新庄用水の北側の地点では、2間×6間の規模をもつ掘立柱建物2棟が確認されました。この建物の南側に掘削された溝からは、「西」と墨書された須恵器の杯が出土しました。また、近接した北側の地区では、鉦物滓（金属器の生産の際に出る不純物）などが出土した金属器製作に関わる工房跡と推定される竪穴建物が見つかりしています。室橋遺跡の約2km南には、八木町屋賀・国府から亀岡市池尻遺跡にかけて、丹波国府の有力な推定地となっている亀岡市池尻遺跡が立地し、発掘調査によって奈良時代の整然と配置された大形建物群が発見されました。野条遺跡や室橋遺跡は、丹波国府の周辺域にあるとみられることから、その管理下にあり、室橋遺跡の奈良時代の大形掘立柱建物群も、耕地管理にあたった役所的な機能をもった建物や倉庫となる可能性があります。

3. 野条遺跡の平安時代末期の建物群

野条遺跡の東部の官山川西側の第10次・第12次調査では、平安時代末期（12世紀中葉）

の東西方向に掘削された溝や、主軸を正方位に揃えた掘立柱建物群や井戸がみつかりました。建物群の柱穴からは、中国製の白磁碗や滑石製の分銅が出土しています。分銅は秤の錘として用いられたと考えられる秤量具で、都城や官衙を中心に出土しています。分銅の類例は、時期の判明している資料はこれまで30例あまりと少なく、大変貴重なものです。分銅には、金属製の素材もありますが、野条遺跡で出土したものは石製品で、平安時代の地方官衙の周辺で出土する傾向があります。野条遺跡の遺構群は、南北・東西方向の地割に沿った規格性の高い建物に、計量に関わる遺物を出土したことから、一般集落ではなく、国衙領を実質的に管理していた受領や在地領主などの屋敷地、あるいは庄園経営に関連する建物群の可能性が高いと考えられます。

野条遺跡の調査では、南北方向の地割が、調査前に周辺にみられた耕作地の地割とほぼ同様の方向をもつことがわかりました。野条遺跡から池上遺跡かけての一带の水田畦畔には、正方位に区画された1町四方（1辺約109m）の方格地割をみることができます。古代には、耕地からの生産性をあげ、税を正確に徴収するために、条里制と呼ばれる土地区画制度が施行されました。六町（約654メートル）四方の区画を里とし、里を東西に連ねたものを条とし、里をさらに一町四方に区画したものを坪としたものです。一部現代にまで残るこうした地割は、条里型地割と呼ばれます。第10次調査でみつかった12世紀中葉の東西方向の溝は、1町の地割を半分に分ける溝とみられ、同様な溝は、第7次調査の際にもみつかっています。

調査地の東には、現在、官山川が「L」字に屈曲して流れています。「L」字の屈曲ラインは、これを境に南東を諸畑、北西を室橋、南を野条とする大字の境界に一致しており、発掘調査の成果によって、こうした地割が平安時代後期～末期に遡る古い地割を残していると考えられます。亀岡市北部の池尻周辺でも、条里制地割が残っていることが知られていますが、八木町東部のこの地域もまた、国府の周辺地域として条里制が施行され、早くから耕地整備が行われたと推定されます。

4. 耕地開発の画期と水路の整備

野条遺跡・室橋遺跡の調査では、これまで多くの灌漑用の水路とみられる溝群がみつかりました。現在、周辺でみられる土地の畦畔は、野条遺跡の北部で大きく変化し、野条遺跡から南部の広い範囲で条里型地割が確認できます。発掘調査では、10世紀～11世紀の溝は、北西から南東へ斜行して掘削される一方、12世紀中葉を境にその掘削方向が南北・東西方向に整備され、大きく変化していることが明らかになりました。前述した第10次・12次調査の正方位をもつ遺構群のほかにも、野条遺跡西部の第19次調査で確認された13

世紀の溝もまた、東西方向に掘削されていることがわかりました。こうしたことから、畦畔の大規模な改変を伴う耕地開発は、12世紀前葉～中葉にかけて行われたと考えられます。

野条遺跡や室橋遺跡が所在する八木町東部一帯は、平安時代末期には吉富新庄の一つである刑部郷おさかべこうに属しました。吉富庄は、現在の京都市右京区京北を中心とした宇津庄を母体にして成立した庄園しょうえんで、12世紀中頃に平治の乱へいじらんで源義朝みなもとのよしともから平家に没収されたのち、平家と縁戚関係にあった藤原成親ふじわらのなりちかが伝領しますが、承安4（1174）年には、丹波国知行国主ちぎょうこくしゅであった成親が後白河院法皇ごしろかわほうおうに寄進したと伝えられます。院政期いんせいきの庄園の立庄では、特に王家領などは寄進された私領を核にし、周辺の国衙領などの公領こうりょうを取り込んで庄園形成がなされる例があり、それまで国衙領であったとみられる刑部郷も、吉富新庄としての立庄に際して取り込まれ、後白河院に寄進されたものではないかと考えられています。そのときに作成された絵図の写しが、「丹波国吉富庄絵図写たんばのくによしとみのしょうえずうつし」とされ、刑部郷一帯も絵図のなかに描かれています。

室橋遺跡や野条遺跡の所在する八木町東部域は、平安時代の伝承が多く残されています。なかでも神護寺を再興した僧文覚もんがくの伝承は、「文覚池」や「通り堂（伝文覚見水場）」など、地元に深く浸透しているものです。現在の灌漑用水路および生活排水路として重用されている新庄用水は、『丹波郡志たんばぐんし』によれば、文覚が文治4（1188）年に開削したものと伝えられます。これまでの発掘調査の成果では、通り堂の南東の地点で新庄用水と重なる12世紀後半の溝状の落ち込みがみつき、さらに下流の新庄用水下層の調査において12世紀後半の溝を確認しました。部分的な調査ではありますが、室橋地区周辺では、現在の新庄用水にほぼ重複するラインで、平安時代末期に水路が再整備されているとみられます。

新庄・室橋・野条・池上地区を流れる現在の新庄用水の原形となる水路は、12世紀中葉の国衙領の再開発という、大規模な地割改変を伴う耕地開発によって整備されたものであったと推定されます。12世紀後半以降は、平家とこれに結びついた藤原氏などの勢力によって開発が進められますが、寿永3（1184）年には後白河法皇の寄進により神護寺領となり、文覚が神護寺の僧として、この地域の開発に乗り出すこととなります。文覚は、各地の開発に活躍した勸進聖かんじんひじりでもあり、刑部郷でもその手腕を発揮したことは想像に難くありません。文覚上人が、灌漑用水路の再整備や渇水期の用水確保のための池の開削などに深く寄与したことが、地元に今も伝えられる文覚伝承の背景にあると考えられます。



第1図 南丹市八木町東部の主な遺跡 (国土地理院 1/25,000 「殿田」「亀岡」)

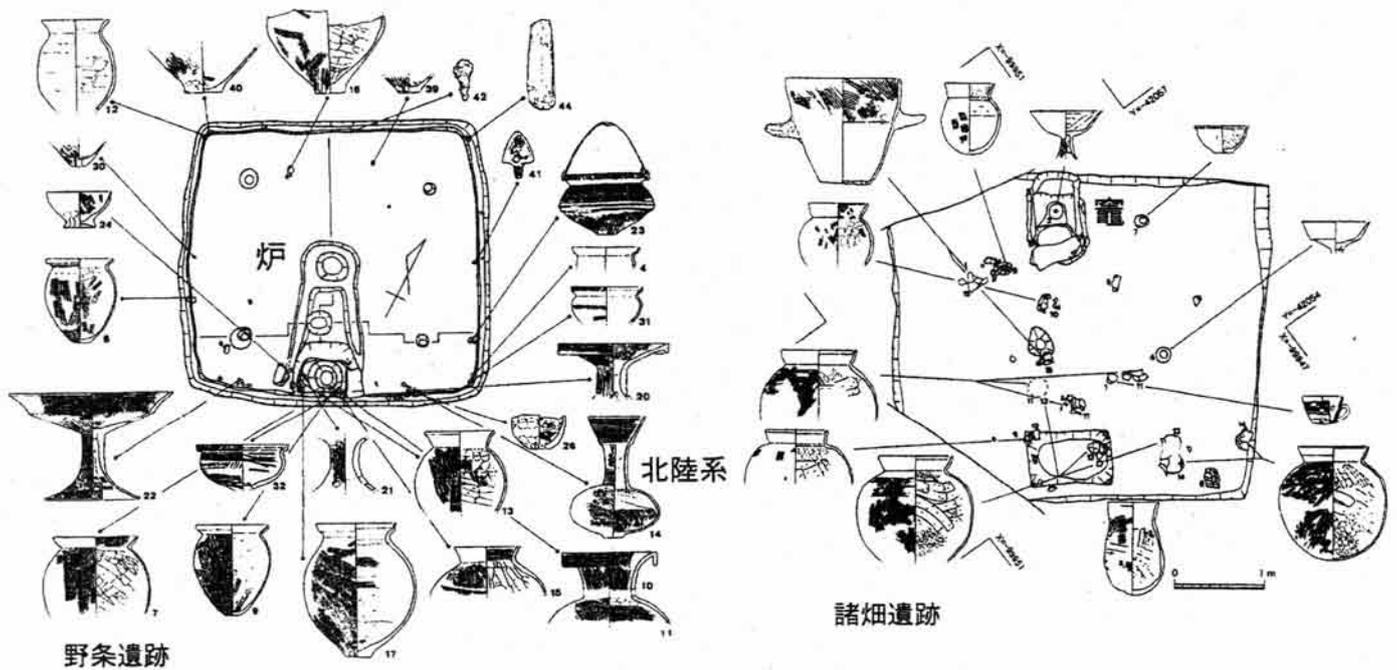
- | | | | | | |
|----------|------------|------------|------------|-----------|----------|
| 1. 野条遺跡 | 2. 室橋遺跡 | 3. 新庄城跡 | 4. 新庄遺跡 | 5. 船枝遺跡 | 6. 清谷古墳群 |
| 7. 大谷口遺跡 | 8. 諸畑遺跡 | 9. 八木田遺跡 | 10. 日置遺跡 | 11. 幡日佐遺跡 | 12. 如城寺 |
| 13. 野条城跡 | 14. 池上院 | 15. 筏森山古墳群 | 16. 城谷口古墳群 | | |
| 17. 池上遺跡 | 18. 池上古里遺跡 | 19. 刑部城跡 | 20. 多国山古墳群 | | |



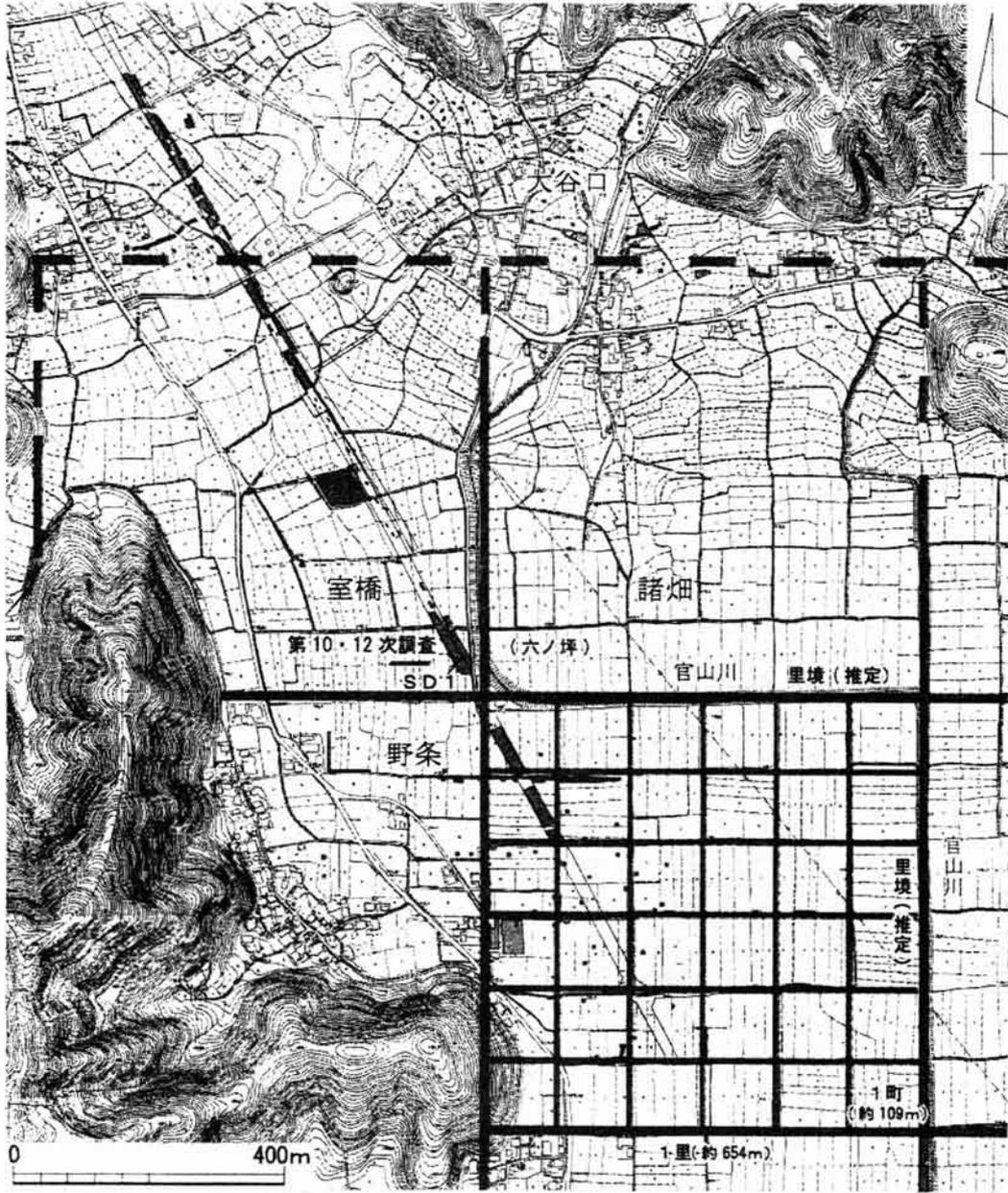
第2図 府営ほ場整備関連事業に伴う過去の調査地



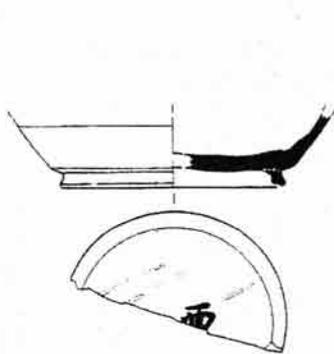
第3図 野条遺跡の弥生集落の推定範囲



第4図 「炉をもつ住居」(野条遺跡：弥生後期)・「竈をもつ住居」(諸畑遺跡：古墳中期)



第5図 野条遺跡周辺にみられる方格地割

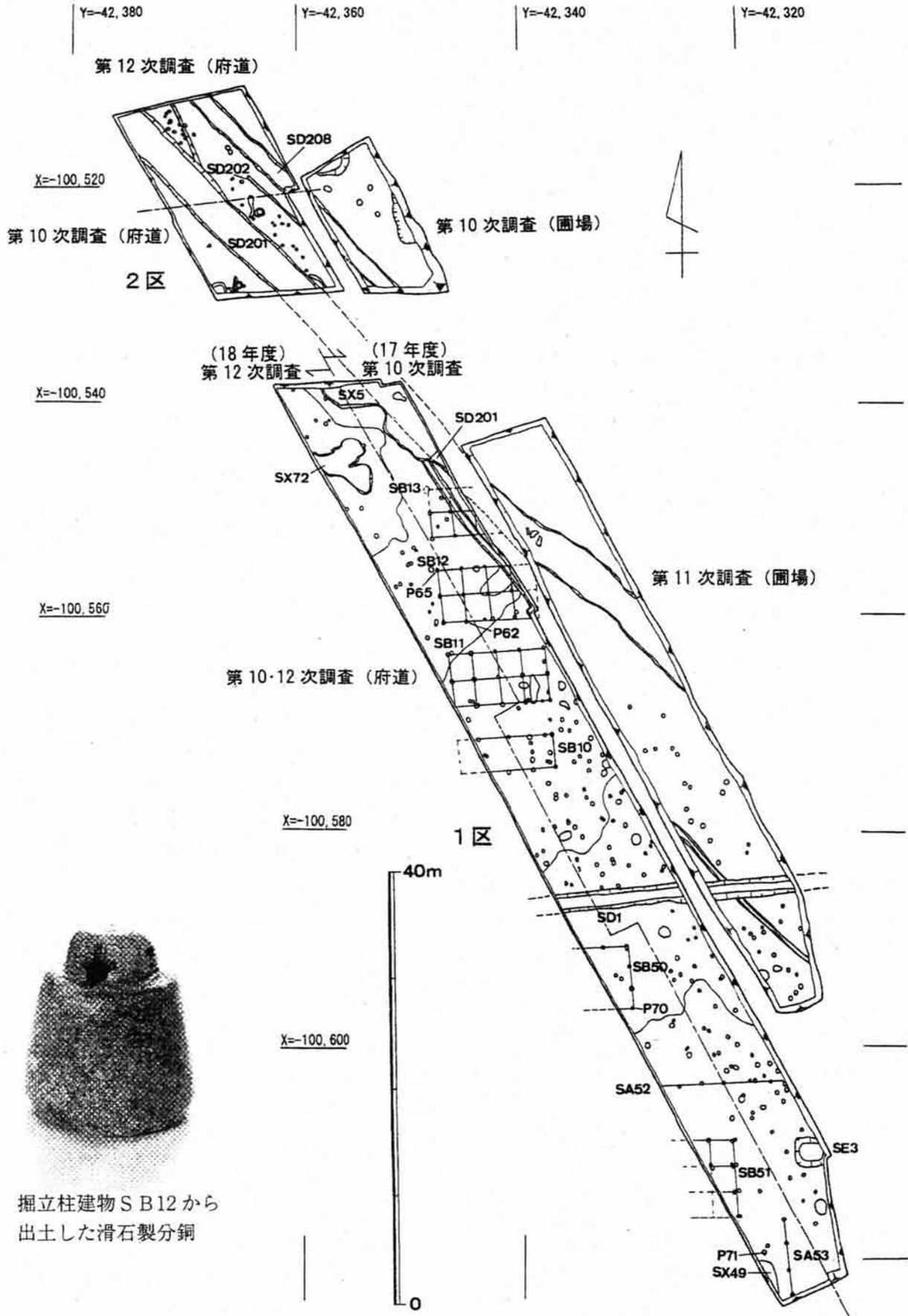


第6図 室橋遺跡出土の墨書土器 (縮尺: 1/3)



第7図 石製分銅(石錐)の諸例

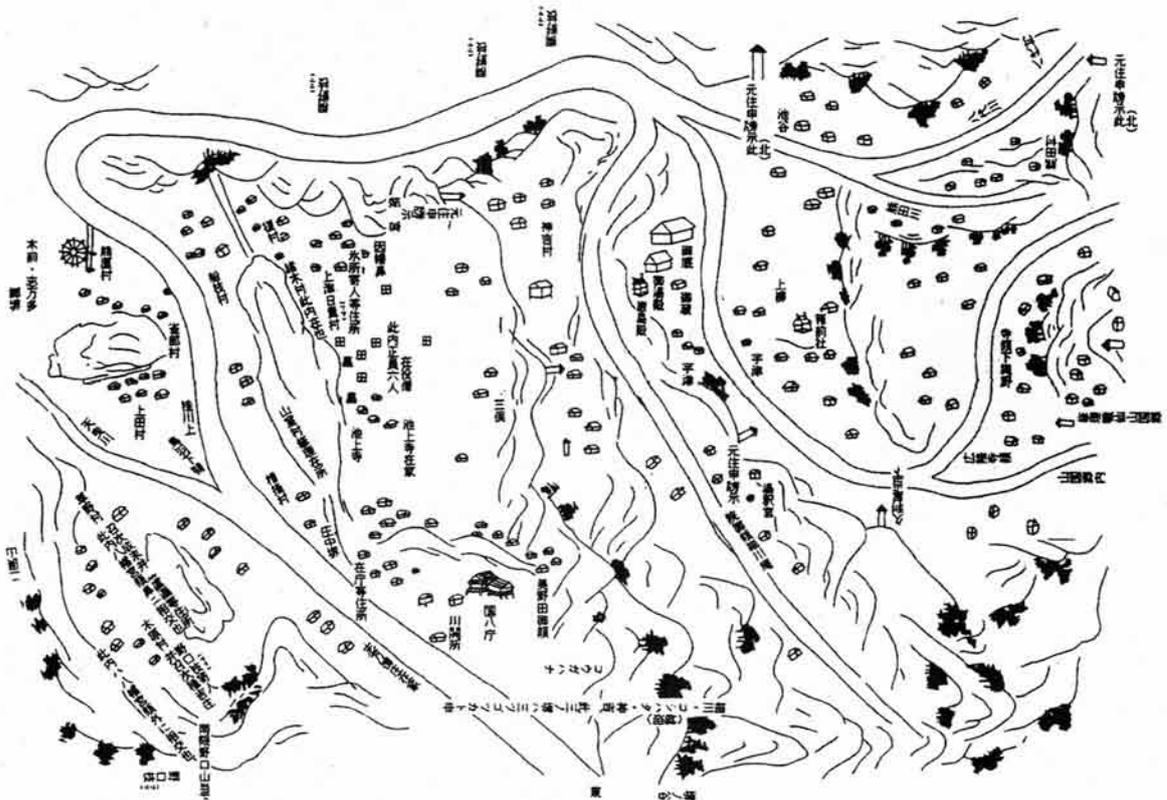
- 1 野条遺跡<12C前>(京都)
- 2 長岡京跡<不明>(京都)
- 3 大宰府桑坊跡<11~14C前>(福岡)
- 4 柿原野田遺跡<8C>(福岡)
- 5 仲島遺跡<古代>(福岡)
- 6 才の峠遺跡<7C末~9C>(鳥根)
- 7 多多良込田<奈良~平安>(福岡)
- 8 大宰府跡<12C~13C初>(福岡)
- 9 海の中遺跡<10C前~11C>(福岡)



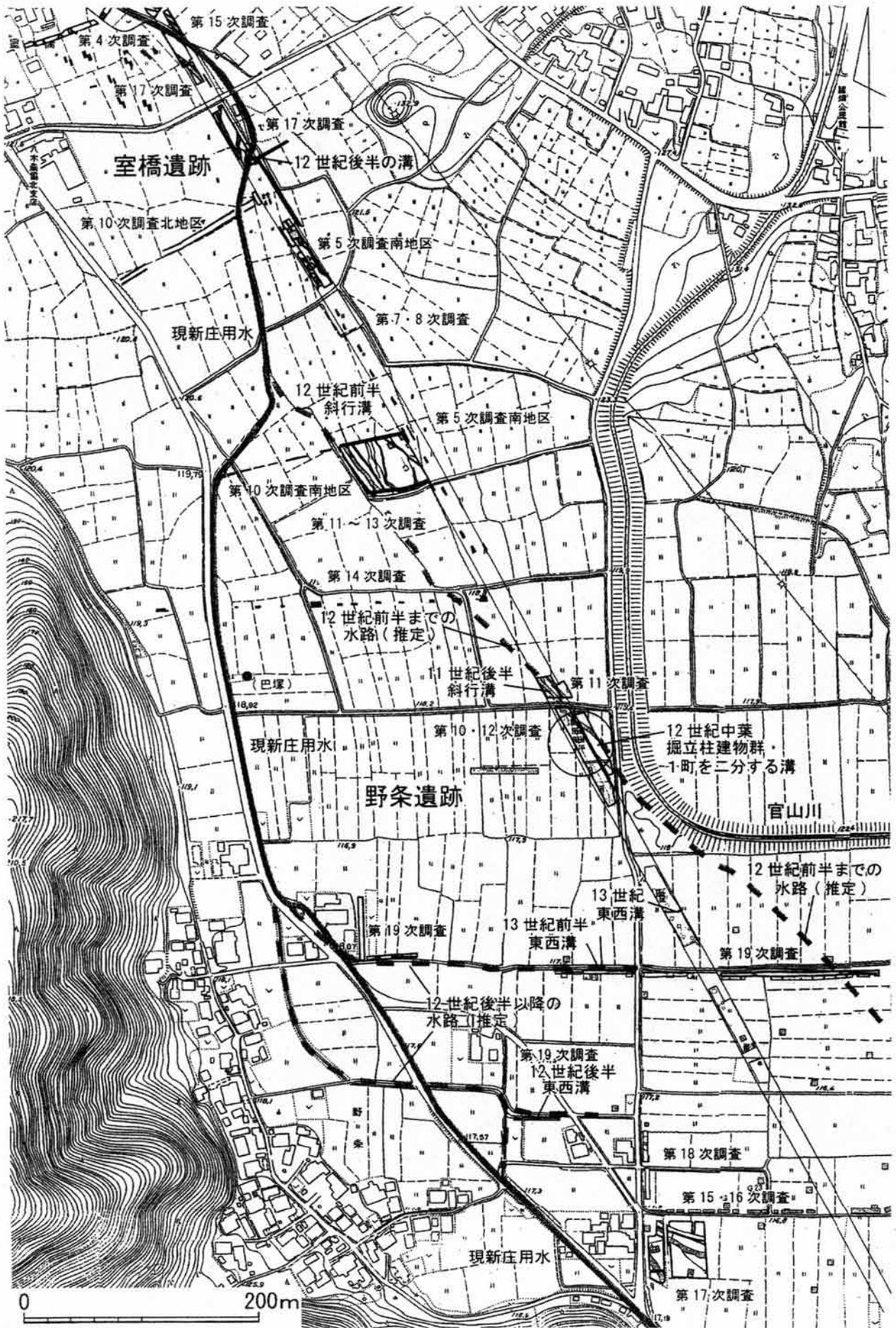
第8図 野条遺跡の建物群(平安末期)と半町を画する溝SD01

西暦	元号	主な出来事	備考
931 ~ 38	承平年間	丹波国船井郡下の九郷の一つとして、「刑部郷」がみえる。	『倭名類聚抄』
1024 ~ 45	万寿～寛徳年間	僧皇慶、「池上房」（現在の大日寺池上院とされる）造営。（丹波守は源章任、周辺は清和源氏の所領）	『谷阿闍梨伝』『四十帖決』
1159	平治元年	源義朝の私領「宇都郷」（京都市右京区京北）、平治の乱の敗北により平家の所領となる。	（「刑部郷」周辺は国衙領とみる説が有力）
1174	承安4年	丹波国知行国主藤原成親（平家の縁戚）、「宇都郷」に周辺5郷（神吉・八代・熊田・志摩・刑部等）を加え、「吉富荘」立荘。神吉・八代・熊田郷を「吉富本荘」に加え、刑部・志摩郷を「吉富新荘」とする。「吉富荘」を後白河法皇御願法華堂に寄進。	『僧文覚起請文』（平安遺文4892）文覚、1168年以降、勸進等により東寺・四天王寺・神護寺等復興はじめる。
		立券にあたり、「丹波国吉富荘絵図写」の原図作成（野条・室橋遺跡含む八木町のほぼ全域が新荘とされた）。	真継正次氏所蔵絵図（戦国～江戸初期の写しとされる）
1177	治承元年	藤原成親、鹿ヶ谷事件で配流。「吉富庄」は平家領へ。	
1178	治承2年	文覚、伊豆配流（1174年）から許され、神護寺へ戻る。神護寺の本格的な再興に尽くす。	『僧文覚起請文』
1180 ~	治承4年～	源頼朝・木曾義仲挙兵。丹波国、一時、木曾義仲の知行。	巴御前の墓（野条地区伝承）
		「吉富本荘」は源頼朝の所領に、「吉富新荘」（刑部郷含む）は後白河院が領有する。	
1184	寿永3年	文覚の求めで、源頼朝「吉富本荘」を神護寺に寄進。	『僧文覚起請文』
1184	元暦元年	後白河院が「吉富新荘」寄進し、一円神護寺領となる。	『僧文覚起請文』
1188	文治4年	神護寺文覚による新庄用水の開鑿（伝承）。	『船井郡誌』（如城寺所蔵「室橋縁由」では治承元年（1177）5月とされる）
1199	正治元年	文覚、後鳥羽上皇に疎まれ、佐渡に配流。神護寺領は没収され、「吉富庄」は藤原範光の所領へ。	
1221	承久3年	承久の乱で藤原氏没官、鎌倉幕府の管領へ。	
1225	嘉禄元年	鎌倉幕府、「吉富荘」を神護寺に寄進。再び一円神護寺領となる。	

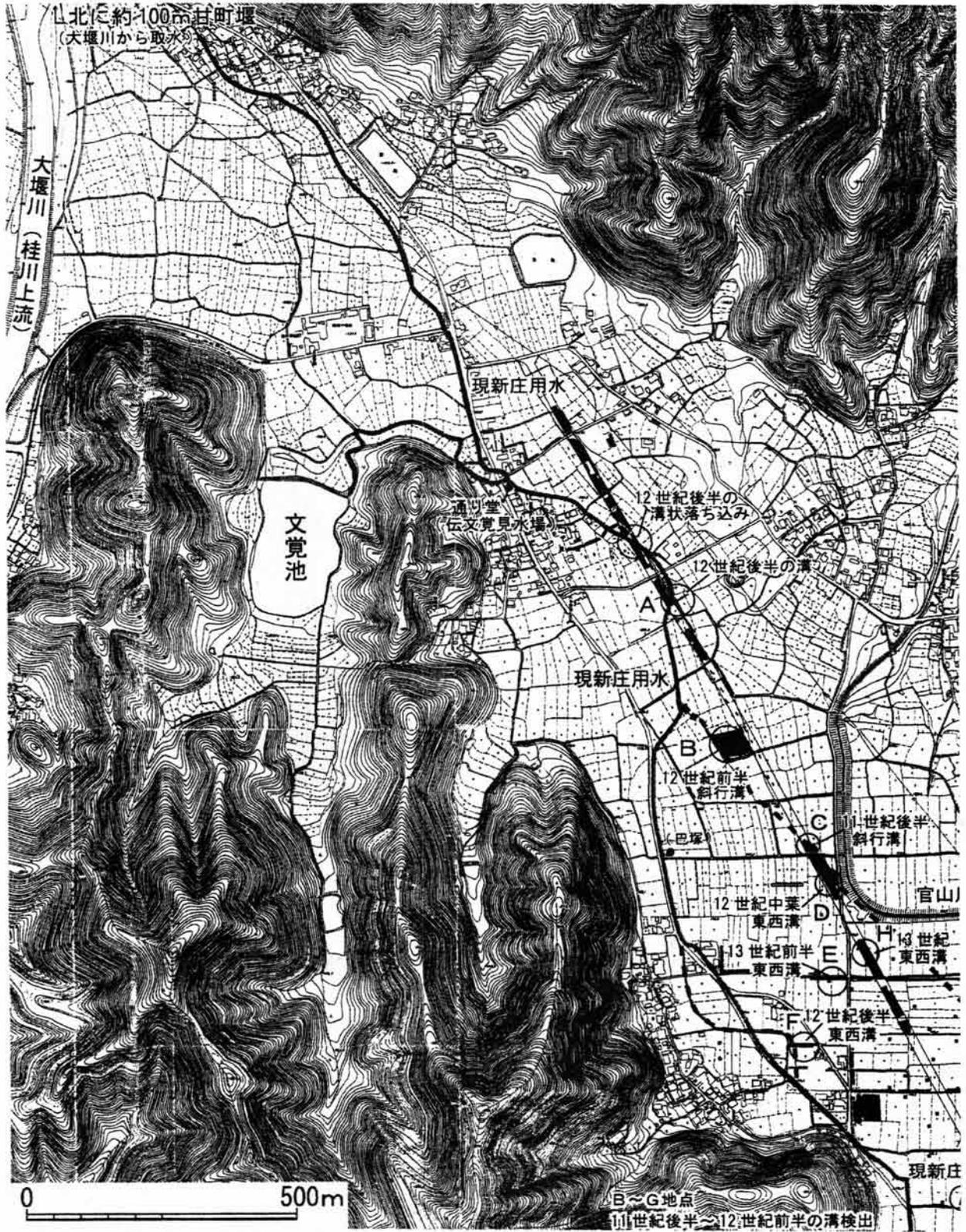
表1 「刑部郷」と「吉富庄」をめぐる関連年表



第9図 「丹波国吉富庄絵図写」トレース図（亀岡市文化資料館図録 1993）



第10図 平安～鎌倉時代の検出遺構と現在の新庄用水



第11図 野条・室橋遺跡の水路群と大堰川・文覚池との位置関係

戦国時代の城から江戸時代の城へ

— 三ノ宮東城跡・園部城跡ほかの調査から —

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

主任調査員 引原茂治

調査員 加藤雅士

1. 京都の戦国時代の城

室町幕府足利將軍家や幕府有力者の後継者争いに端を発して応仁元(1467)年に勃発した応仁・文明の乱は、京都を戦場として10年以上続きました。この間に幕府の力は失われ、各地で自分の勢力拡大を目指す人たち同士がほぼ100年間にわたって争いを繰り返すようになりました。この応仁・文明の乱以降の室町時代後半期を戦国時代と呼びます。戦国時代の後期には、全国を支配しようとするための戦い、いわゆる天下統一を目指した戦いも繰り広げられました。このような戦乱の時期に、戦いや防衛の拠点として、多くの城が築かれました。これらの城のなかには、見晴らしが利いて攻められにくい山の上に築かれたもの(山城)もあります。また、単に堀(空堀、水堀)や土塁で囲うだけでなく、守りやすく攻めにくいような工夫が様々にされています。敵が進出しにくくするために通路を曲折したり、進入してきた敵を足止めして周囲から攻撃する入り口(枳形虎口)を設けたりしています。

京丹波町三ノ宮東城跡は、出土した陶磁器や土器などから、室町時代後期の16世紀前半頃の城跡と考えられます。この城跡では、塀を設け、斜面部に堅堀や切岸を造り出すなど、様々な防御のための工夫がされています。また、建物基礎や通路の要所に石積を築き、岩盤を削り出して各曲輪を整形するなど、丁寧な城造りの様子がうかがえます。また、城内に礎石建物があつたことを確認しました。綾部市平山城跡では、斜面に縦方向の堀を14条連続して掘った畝状堅堀群が見つかりました。これは敵が横方向に展開して攻撃してくるのを防ぐためのもので、比較的ゆるい斜面に設けられます。舞鶴市大俣城跡では、通路を二回折り曲げた虎口が良好に残っていました。柱穴も見つかつており、門が建っていたのかもしれませんが。

簡素な掘立柱建物がわずかにあるのみで非常時だけに使用されたとみられる一般的な戦国時代の山城と較べると、三ノ宮東城跡や平山城跡、大俣城跡は、食器として使われたと

考え跡られる国産陶器や高級品の中国製磁器などが多数出土しており、日常生活が行われていたとみられます。また、平山城跡では、生活空間から一段高い狭い平坦地に倉と考えられる^{れきじ}礎敷きの礎石建物がみつかっています。後の^{てんしゅ}天守の祖形のような建物かもしれません。

京田辺市^{たなべじょうあと}田辺城跡では、丘の東斜面から^{いしがき}石垣を築いた虎口が見つかりました。虎口は、方形の平坦地で、正面（西側）に石垣を築いています。その石垣に沿って、南側に上部へ通じる^{いしだん}石段が作られています。石垣と石段の間には、^{ひらがわら}平瓦で護岸された溝が設けられています。北側と南側にも石を抜き取った跡などがあり、その部分にも石垣があったと考えられます。東側には門の^{そせき}礎石と考えられる石が置かれています。このような状況は、近世の城の枡形虎口によく似ています。石垣の^{せきざい}石材は、面をそろえて^{ひらづ}平積みされています。石垣の傾斜角度は86°前後で、ほぼ垂直です。石材は、黒っぽい自然石と白い^{かこうがん}花崗岩の割石を使用しています。白黒を対比させて装飾的な効果を意図しているのかもしれません。この石垣には、^{しぜんれき}自然礎を使った^{うらこ}裏込めが施されています。15世紀頃の瓦が出土しており、その時期に築かれた石垣と考えられ、数少ない中世の石垣と言えます。土造りが多い京都府の中世の城の中で、石垣を使用した珍しい城です。

2. 明智光秀に関する城跡

戦国時代後半期、織田信長が台頭し、丹波には、配下の明智光秀が侵攻してきます。丹波に所在する中世山城跡については、明智氏による改修が行われているものがあることが福島克彦氏によって指摘されています。丹波においては、織田政権および明智氏の気配を感じさせる城跡があります。

^{やぎじょうあと}八木城跡は、南丹市八木町にあります。調査を行なったのは、八木の市街地南西側に聳える城山の北麓にあたる部分です。八木城跡は、15世紀前半以降、^{たんばしゅこだい}丹波守護代となった^{ないとう}内藤氏の居城として、府下でもよく知られた城跡です。また、内藤ジョアンゆかりの城跡としても知られています。

発掘調査では屋敷地跡や石垣、礎石建物跡などを検出しました。遺構を検出した範囲は、福島克彦氏によって明智氏の時期に使用されたと推定される山上の曲輪群から麓に向かって派生する2本の尾根の間にあたります。出土遺物からみても、明智氏の時期の可能性が考えられます。また、この尾根の間の谷部に直線的に延びるとみられる^{どうろじょういこう}道路状遺構を検出しました。このような景観は、^{あづちじょうあと}安土城跡などと類似しており、明智氏による造作の可能性があります。調査で検出した屋敷地跡などの遺構群は、出土遺物等から見て、明智氏の造作によるものである可能性が考えられます。

上林城跡^{かんばやし}は、綾部市東部にあります。通称上林谷と呼ばれる細長い谷底平野内の独立丘陵上に位置します。中世の上林地区の有力氏族であった上林氏の居城とされています。発掘調査では、西の曲輪で畝状堅堀群を検出しました。この堅堀群は、角礫を多量に含む埋土で厚く覆われており、短期間のうちに埋め立てられた様子でした。また、頂上^{ほんまる}の本丸では、石垣状の石積みで形成された^{やぐらだい}櫓台が破壊され埋められて^{のろしだい}狼煙台に変えられた状況が確認されました。このような改変は、上林氏が明智軍に屈した結果の武装解除に伴うもの、と調査を担当された中村孝行氏は指摘されています。

京都府亀岡市に所在する^{かめやまじょうあと}亀山城跡、福知山市に所在する^{ふくちやまじょうあと}福知山城跡は、いずれも、明智光秀が丹波支配の拠点として築城したという由緒をもっています。両城ともに、河川に向かって張り出す丘陵の先端部に^{しゅかく}主郭を設けています。亀山城跡では、後の豊臣期、徳川期にも重視され、改築されており、明智期の様相は不明です。福知山城跡は、^{てんしょう}天正期に築かれたとされる^{てんしゅだい}天守台などの石垣が残っています。江戸時代には丘陵下部まで^{じょうかく}城郭内になっていますが、丘陵北側下部で行った調査では、その付近の造成は、17世紀初頭以降に行われたものと考えられます。

このように、城の姿を変えることにより、また、新しい支配拠点を造ることにより、支配者や支配権力が交替したことを表現しようとしたものと考えられます。これは、一方で、丹波における中世から近世への変換をも物語るものと言えます。

3. 丹波の近世城郭跡「園部城跡」

豊臣秀吉の天下統一から江戸時代の終わりまでの時期を近世と呼びます。近世大名の城の周辺には^{じょうかまち}城下町が営まれます。この近世城下町が母体となっている都市は、全国的にみても、多くあります。したがって、近世の城跡は、その地域の人たちにとって、もっとも身近な親しみやすい近世遺跡と言えましょう。

丹波地域では、南丹市^{そのべじょうあと}園部城跡で調査が行われています。園部城は、^{たじまのくにいずし}但馬国出石から^{たんばのくにそのべ}丹波国園部に移封された^{こいでよしちか}小出吉親によって、^{げんな}元和5(1619)年から元和7(1621)年にかけて築城されました。以後、幕末まで約250年にわたって、園部藩主小出氏10代の居城となりました。小出氏は^{むじょうしゅかく}無城主格の大名であり、その居城である園部城も本来的には園部^{じんや}陣屋と呼ぶべきものです。^{しょうおう}承応2(1653)年以後の園部を描いている「丹波国園部絵図」の園部城主郭部分では、門の位置は変わらないものの、^{やぐらもん}櫓門ではなく、^{やくいもん}薬医門か^{むなもん}棟門と考えられる簡素な門が描かれています。櫓もありません。園部藩は、^{げんじ}元治元(1864)年に修築願を幕府に出したが、認められていません。その後も幕府と交渉し、^{けいおう}慶応3(1867)年に内諾を得ましたが、直後の^{たいせいほうかん}大政奉還で正式な許可は得ていません。そのため、明治新政府に願い出

て修築が認められ、園部陣屋は園部城となりました。現存する櫓門や巽櫓などは、この時に建てられたものと言われます。

これまでの発掘調査の結果、本丸跡では、石組みの溝などがみつかっています。また、堀跡では、18世紀頃の九州肥前（佐賀県）産の鍋島焼皿などが出土しています。鍋島は、佐賀藩直営の焼き物であり、大名間などの贈答用に作られた精巧な磁器で、原則として一般に出回ることにはないとされている焼き物です。いかにも近世大名の城跡からの出土遺物としてふさわしいものです。なお、府亀岡市以北では、これ以外に鍋島の出土は確認されていません。

平成22年度に実施した第8次調査では、築城時の元和年間に掘削され、幕末の修築時に埋められたと考えられる東西方向の空堀が見つかりました。これにより、現状では同一の平坦地となっている主郭部分が、江戸時代には南北2か所の曲輪に分かれていたことが判明しました。また、空堀は主に北側からの土入れによって埋められており、空堀より北側の曲輪が南側の曲輪よりも高くなっていた可能性も考えられます。さらに、空堀には南北方向の土橋が設けられており、土橋は北側の曲輪の3m手前で途切れていました。この途切れた部分には、跳ね橋もしくは取り外しが可能な簡易な橋が架けられていたと推測されます。京都市二条城では、城外から西門に向って堀の中に土橋が設けられており、西門に到らずに途切れます。土橋が途切れる側が重視されています。園部城の空堀で分けられた南北の曲輪では、北の曲輪が高くなり、土橋が北の曲輪の手前で途切れます。このようなことから、北の曲輪が南の曲輪より要地と意識されていたものと考えられます。あたかも、北の曲輪が本丸、南の曲輪が二の丸として意識されているようです。南の曲輪には、大書院や御殿などの政務の場や藩主の生活の場としての建物群がありました。近世城郭では、本丸は城の象徴的な空間で、二の丸に実用的な主要施設が置かれる例があります。江戸時代の園部城の主郭部は、陣屋というよりも城郭に近い様相であったことが考えられます。

江戸時代に作成されたと考えられる絵図には、この空堀は描かれていません。城絵図では詳細な建物配置などは描かれていませんが、堀や石垣などの、いわゆる縄張りについては描かれています。小出吉親の築城時には、幕府に絵図を提出し、相談を重ねて造作を行ったとされます。その際、櫓の普請も願ったが、二重の堀や狭間付の塀などがあるので櫓は必要なしということで、認められなかったようです。幕末の修築願には、その時に櫓台までできていたのにそのままの状態であることなどが理由にあげられています。上記「丹波国園部絵図」には、幕末に大手門として修築された「北ノ門」の横に「櫓台」が描かれています。同図には主郭部分に建物は描かれませんが、安政6(1859)年製作と考えられる「

園部城略図」には主郭北東隅部に「ヤクラ」が記されています。位置的に、北の曲輪の北東隅にあたり、天守に擬した櫓もしくはその櫓台と考えられます。しかし、両絵図ともに、今回検出した空堀は描かれていません。あたかも一面の平坦地のように描かれています。未完成状態の造作であっても、空堀を描けば、幕府が認めなかった城郭的な印象を与えるため、描写が控えられたのでしょうか。ならば、城郭として修築することを認められた幕末の時点で、なぜ埋められたのでしょうか。1つの理由として、幕末の修築時には北西側の小麦山こむぎやまに天守に擬した三重櫓さんじゅうやぐらが建てられ、そこが本丸に擬せられたためとも考えられます。したがって、それまで本丸、二の丸に分かれていた主郭部分が、全体的に二の丸的な空間に変えられた可能性もあります。いずれにしても、今回検出した空堀は、今まで知られていなかった遺構と言えます。

江戸時代の北の曲輪の状況については、幕末の修築に伴う削平まくへいや明治時代以降の開発で過半が失われたと考えられ、今となっては不明です。今回検出した空堀は、不明な点が多い江戸時代の園部城を考えるうえで、重要な手掛かりとなる遺構と言えましょう。なお、絵図については、南丹市立文化博物館発行の図録等を参照してください。（引原茂治）

4. 三ノ宮東城跡

(1) はじめに

三ノ宮東城跡は船井郡京丹波町内、旧瑞穂町域の三ノ宮に所在します。室町時代後期の戦国時代と考えられてきた山城やましろです。谷向かいのすぐ近くには三ノ宮西城跡さんのみやにしじょうあとがあり、城主にかんする地元伝承があることなどから注目されてきた城ですが、丹波綾部道路建設に先立つ発掘調査により、山城のほぼ全域を調査することができました。発掘調査は、国土交通省近畿地方整備局福知山河川国道事務所の依頼を受けて、平成22・23年度に公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターがおこないました。

(2) 位置と歴史環境

現在の国道173号と府道26号が交差しているところに、三ノ宮東城跡はあります。国道173号は綾部と篠山を結ぶ街道です。綾部街道ともよばれており、国道9号の側道的役割を果たすほか、綾部では国道27号と交わっています。府道26号は旧三和町と下山を結ぶ道路です。旧三和町では国道9号と、下山では国道27号と交わっています。国道27号は京丹波と舞鶴を結び、舞鶴からは丹後街道として敦賀までを結んでいます。こうした点から交通の要衝にある城ということが出来ます。

三ノ宮は歴史が深いところでもあり、城跡の東300mにある酒治志神社しゅうじしは式内社しきないしやに比定

さがれています。少なくとも平安時代末期にはこのあたりに「山内」という^{しょうえん}荘園があったようで、後の時代の文献でもその名が散見できます。

(3) 城の構造

三ノ宮東城跡は山地から延びる尾根の先端部にあります。城の北東部に、堀切とよぶ堀を3条設け、さらに^{どるい}土塁を築きます。土塁の上から、堀切の底までの比高は5.5 mあります。これにより、城を尾根から画しています。

城跡は^{くるわ}曲輪とよぶ平坦地と、それらを結ぶ道で構成されています。基本的に曲輪や道は、山側の斜面を急角度に削って作っています。そして反対の谷側には土を盛ることによって平坦面を広く確保できるようにしています。曲輪の配置は、尾根筋に沿った北東・南西方向（曲輪1・2・6）にあります。さらに、尾根の北西斜面（曲輪3・4・5）にも曲輪が配置されます。尾根のもう一方の斜面である、南東斜面に曲輪がないのは特徴的です。これは、後にも述べるように、南東方面に対する防御意識があったものと考えられます。

以下、各曲輪の概要を説明します。

曲輪1 城の最高所にある平坦地で、^{ほんまる}本丸にあたります。北東-南西に細長い平面形をしていて、大きさは最も長いところで42 m、幅は16 mです。標高は281 m前後ですので、城跡の下をはしる国道173号とは約45 mの比高があります。

曲輪1には出入口が2つあります。まず北東の隅（虎口1）には確認部の長さ8 m、幅1~1.5 m、比高4 mの^{しやろ}斜路があります。斜路には階段状の石（石段）が2つあるほか、側面には^{いしづみ}石積（S V16）が作られています。この斜路は堀切にまで続いているようです。またすぐ北には、石積（S V13）で道が作られた跡があり、土塁への昇り降りが容易にできるようになっています。

もう一つの入り口は、南西隅にあります（虎口2）。ここには長さ6 m、幅5 m、比高2 mの斜路があり、側面には石積（S V 9）が作られます。これらの石積は^{どど}土留めの役割をすると共に、視覚的に荘厳を演出していると考えられます。南東隅の出入口（虎口2）のほうが道幅が広いことから、こちらが正面の出入口だったのでしょう。

曲輪1では、^{そせきたてもあつ}礎石建物跡を3棟検出しました。最も北東にある礎石建物跡（SB 1）は4間四方の正方形の建物です。最も大きく、この城の中心的建物と考えられます。礎石は、30cm程度の人頭大の大きさです。近くの河川などから運んできたようで、平らな面を上にして丁寧に据えられていました。北東の柱筋には、^{かまど}竈の可能性のある石のまとまりもみつかりました。また、建物の北東で石を使った穴（^{いしづみどこう}石積土坑SK 6）を検出しました。このような穴は、貯水用の穴やトイレとして作られる場合もありますが、土の観察などから

貯蔵穴ちようぞうけつの可能性が高いと考えています。

南東隅にある礎石建物もせきたても（SB 2）は、2間×3間の長方形の建物です。曲輪1の正面出入口（虎口2）に接して作られていることから、櫓やぐらのような性格をもった建物であると考えられます。これら2つの建物の間にも、礎石建物（SB 3）があったとみられます。しかし礎石の残りが良くないため、復原が難しくなっています。

曲輪1の南東の縁辺部では、列状に並べた拳大こぶしだいの石を検出しました（石積SV14）。石の列は、幅0.5～0.7mで長さ2～5m程度のものが途切れ途切れ続いています。その総延長は30mです。これは、塀へいなどの基礎部分と考えられます。もう一方の、北東の縁辺部には石の列が作られないことも興味深い点で、南東方向への防御意識が働いていたとみられます。

曲輪2 曲輪1の南西にある半円形曲輪で、大きさは南北14mで東西9mです。ここでは礎石建物跡を1棟検出しました（SB 5）。2間×4間の長方形の建物です。正面出入口（虎口1）に接して建てられており、建物本来の機能と共に、視覚的にも際立たせる役割を果たしていたと考えられます。建物の東では貯蔵穴と考えられる、石を用いた穴（石積土坑SK 7）を検出しました。

曲輪2の南東の縁辺部では列状に並べた、人頭大の石を検出しました（SV15）。曲輪1にあった石の列とは使っている石の大きさは少し違いますが、南東の縁辺部にのみ並べられるという点では共通しています。これもやはり、南東方向を意識した塀などの基礎部分と考えられます。

曲輪2の南西～南東の斜面には、たてぼり堅堀があります。斜面に直行して設けられる堀のことで、連続して6条つくられています。堅堀は、進入してくる敵が、斜面を横方向に移動するのを阻止するためのものです。三ノ宮東城跡の場合、下の曲輪6から曲輪1や2へ進入してくるのを防いでいるのでしょう。このうち南東斜面に設けられた2条の堅堀（堅堀1・2）は、横断面形が「V」字で最大の深さが1.5mとかなり深く掘られています。

曲輪2の北西の斜路を下っていくと、曲輪3があります。この斜路の側面には、石が積みまれています（SV10）。傾斜にそって、長さ30cm程度の長方形の石を1～7段積んで斜路の側面を保護しています。

曲輪3 曲輪1の東にある、長さ25m、幅9.5mの長方形の曲輪です。曲輪1より5m低い位置にあります。雨水等の対策として、山側の斜面裾には、幅0.2～0.5mの排水溝をめぐらしています。

曲輪3から「L」字状にのびる斜路を下ると、曲輪4があります。この斜路にも排水溝が掘られています。また途中、道が折れ曲がるところには石積（SV11）があります。

曲輪4 曲輪3の東にある、長さ45 m、幅6.8 mの細長い曲輪です。曲輪3からは、7 m低い位置にあります。曲輪4では、礎石や小さな穴を複数検出することができました。おそらく、ここにも建物が存在していたと考えられますが、保存状況が良くなかったために建物を復原するまでにはいたりませんでした。また曲輪の北部で列状に並べられた石(SX24)を検出しましたが、性格は不明です。

曲輪4の南の斜路を下ってゆくと、曲輪6があります。この斜路の途中には、10の小さな穴が直線的に並んでいます(SA21)。穴は0.2 mの円形で、深さは0.6 mの小さなものです。斜路の山寄りにあることから、土留めの柵などがあったと考えられます。

曲輪6からさらに下ってゆくと、曲輪5があります。その途中、曲輪5のすぐ南では、1間×2間に並ぶ穴を検出しました(SX23)。穴は0.25 mの円形で、最も深いもので深さ0.65 mあります。位置からして、門の可能性ががあります。

曲輪5 曲輪4の東にある、長方形の曲輪です。曲輪4からは8 m低い位置にあります。やはり山側の斜面裾には排水溝をめぐらせています。排水溝が延びているところまでが曲輪(南限)とすると、長さ20 m m、幅8.3 mの規模となります。ここでも礎石や穴、溝を検出しましたが、建物に復原するまでにはいたっていません。

曲輪5の北には、方形の落ち込みがあります。この落ち込みは、北東の調査範囲外へと下っていきます。土の堆積状況を調べてみると、土を積み重ねて人為的に作った落ち込みであることがわかりました。曲輪5への出入口(虎口3)であると考えられます。

曲輪6 曲輪2の南にある半円形の曲輪です。この曲輪の北東の斜面裾では、礎石列を検出しました。6つの礎石が直線的に並んでいるのですが、建物等に復原するにはいたっていません。曲輪ほぼ中央では、長さ1.8 m、幅1.2 m、深さ0.2 mの穴(SK18)を検出しました。穴の性格は不明ですが、中から石製の阿弥陀仏像あみだぶつぞうが出土しました。石材として持ち込まれたものと考えられます。

(4) 出土遺物

陶磁器や金属製品、石製品などが出土しました。目をひくものとしては、兜かぶとの部品である鉄形台くわがただい、鎧よろいの金具である鞋こはぜ、刀装具である筭とうそうぐなどが出土しています。こうしたものがある一方、いちばん出土の多いのは中国製の磁器じきです。年代的に15世紀後半～16世紀前半頃にかけて生産・輸入されたものとみられます。とくに曲輪1・2・6で多く出土していますが、3・4・5の曲輪では出土が少ない傾向にあります。そのほか播鉢すりばちや甕かめなど、日常的に使われる調理具や貯蔵具も出土しています。加えて茶道具の水差しみずさしと考えられる、信楽産しがらきの鉢はちも出土していることから、ある程度日常的に人が城にいたと考えられます。

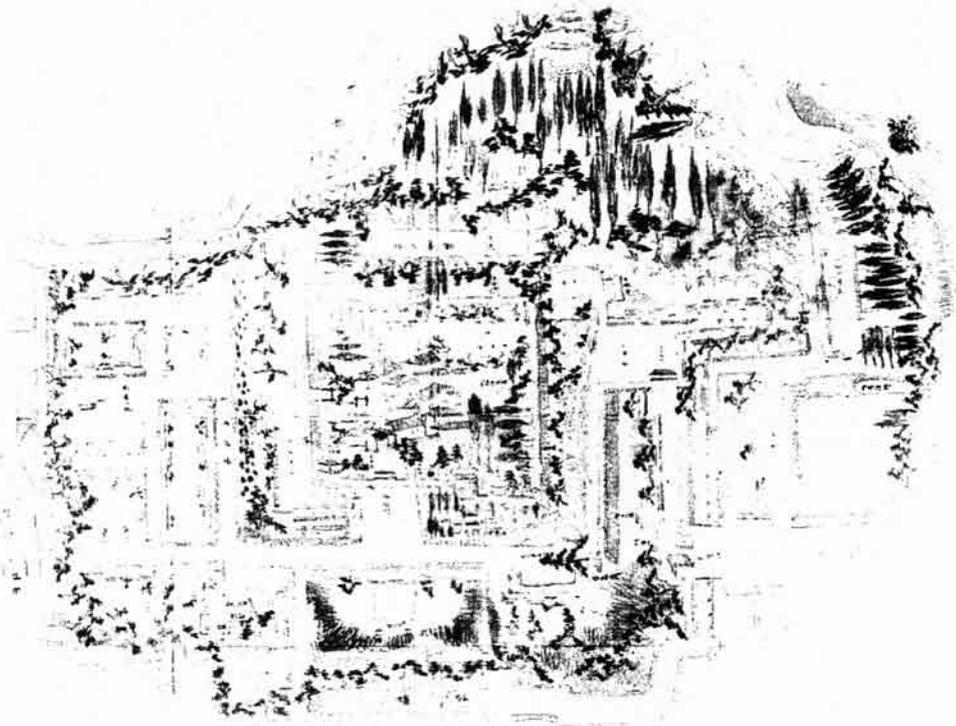
(5) まとめ

三ノ宮東城は、出土した遺物の年代から16世紀前半頃の城と考えられます。

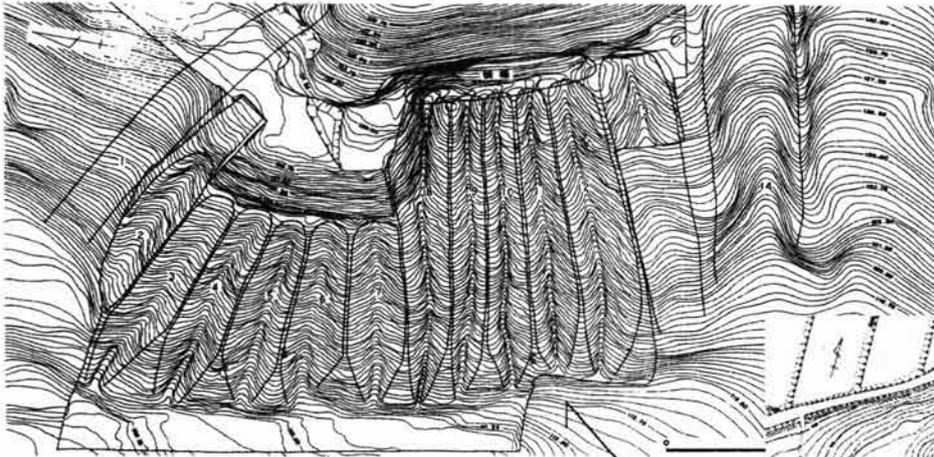
築城にあたっては山側を削り、谷側に土を入れて平坦面をつくるような大掛かりな土木作業をしていたことが伺えます。一方、各所にみられる整然とした石積みなどは、丁寧につくられた城であるようにみえます。

多く出土した中国製磁器など遺物の質から判断すると、城には日常的に人がいたと考えられます。しかし曲輪ごとに出土量の偏りがあることから、中国製磁器の出土が多い曲輪1・2・6は日常的にも使われるのに対して、出土の少ない曲輪3・4・5は非常時の使用を主たる目的としていた可能性もあります。

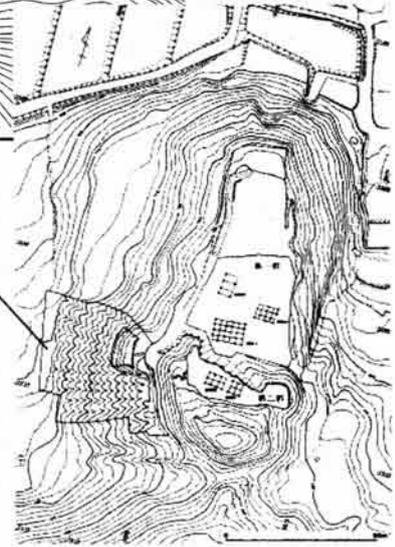
曲輪の配置や石積の方向から、南西方向に防御意識を働かせていたようです。一方の北東方向には曲輪が階段状に築かれるほか、この方向には三ノ宮西城跡があります。城の下で道が交わっていますが、三ノ宮東城跡からの眺望は南の京都方面が見通せません。三ノ宮西城跡からみると、北の綾部方面が見通せませんが、京都方面はよく見えます。こうしてみると2つの城の有機的関係を想像されます。(加藤雅士)



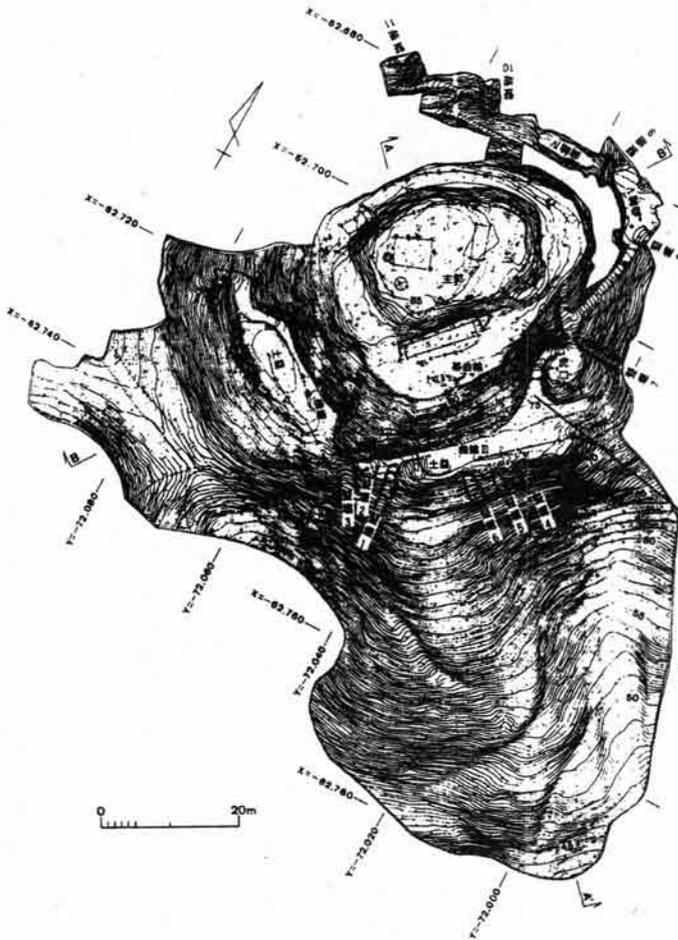
園部城絵図から



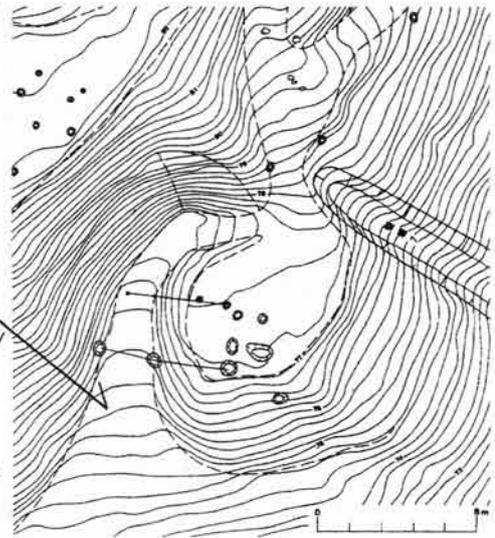
第1図 平山城跡畝状豎堀群



第2図 平山城跡



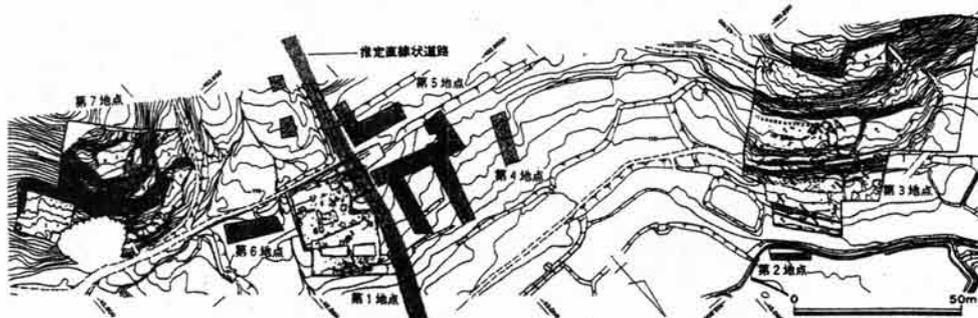
第3図 大俣城跡



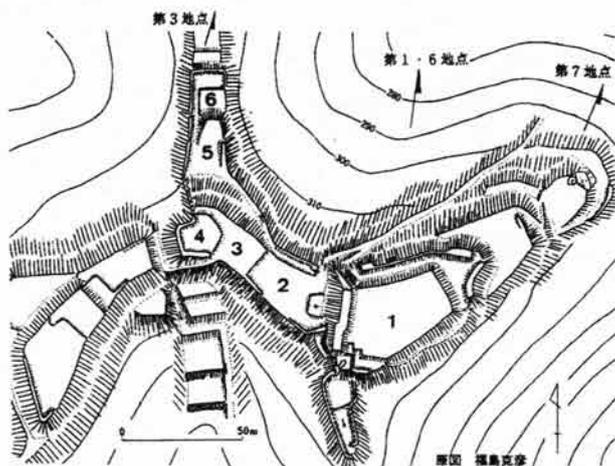
第4図 大俣城跡虎口



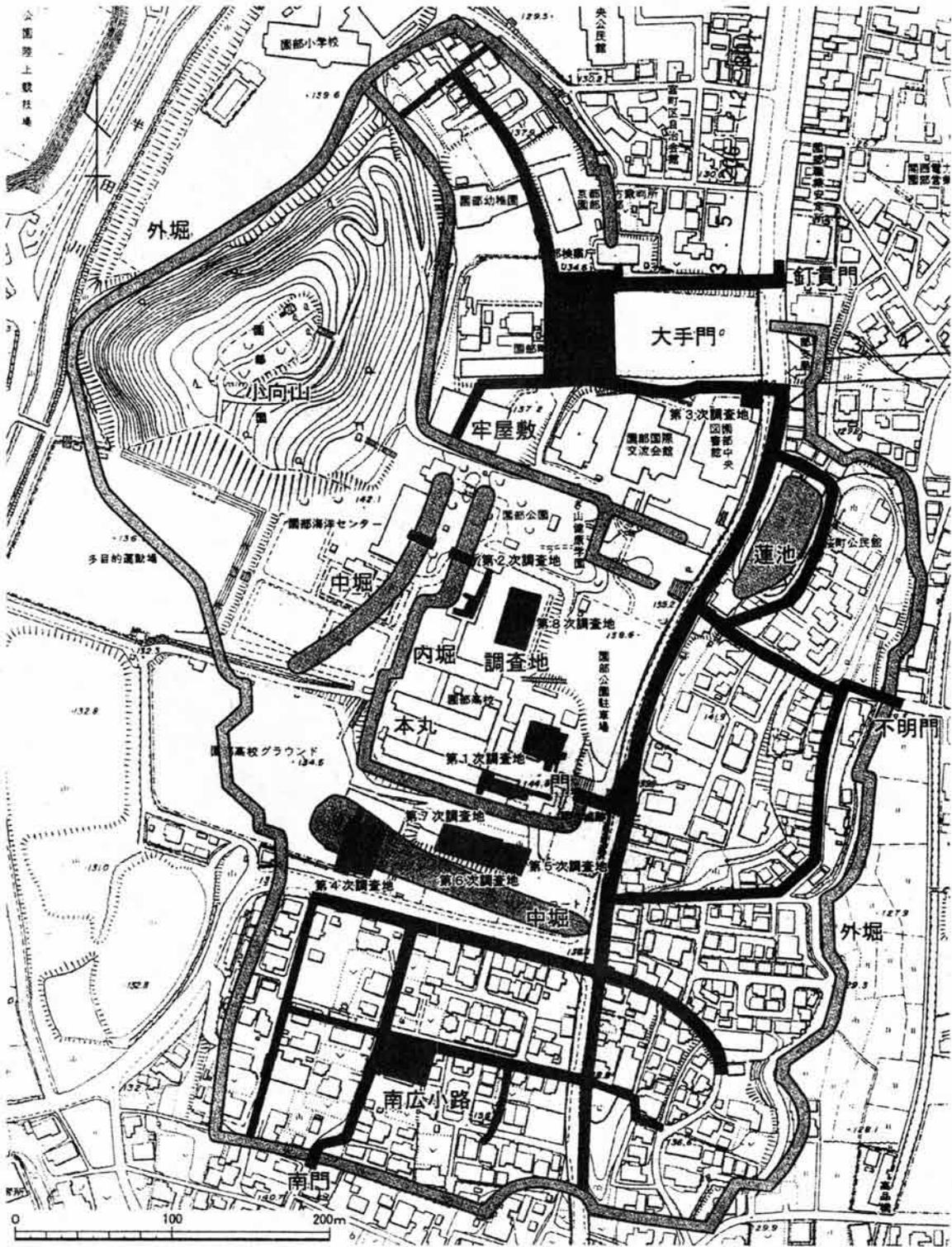
第5図 八木城跡第7地点および石垣



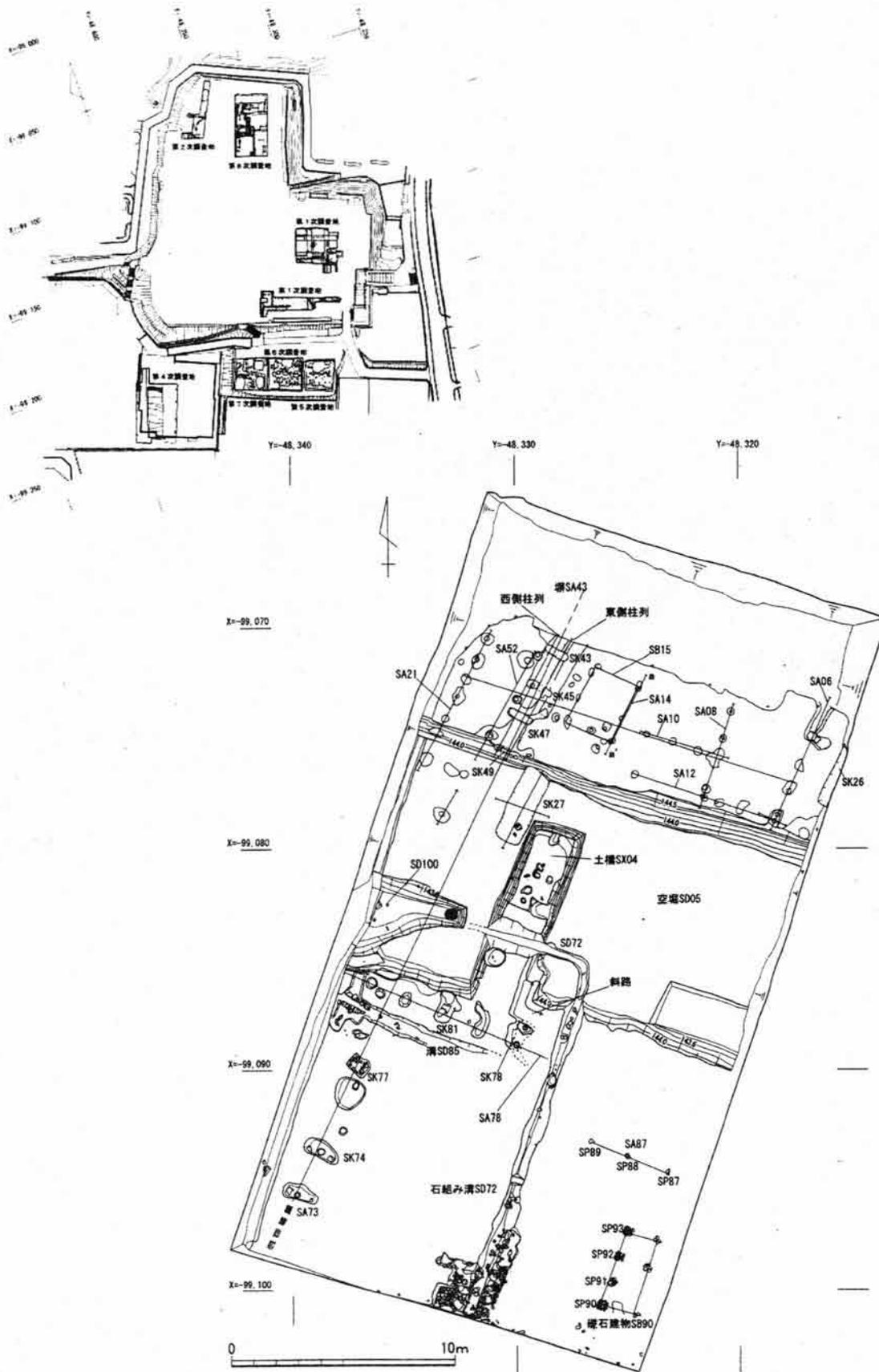
第6図 調査地全体図



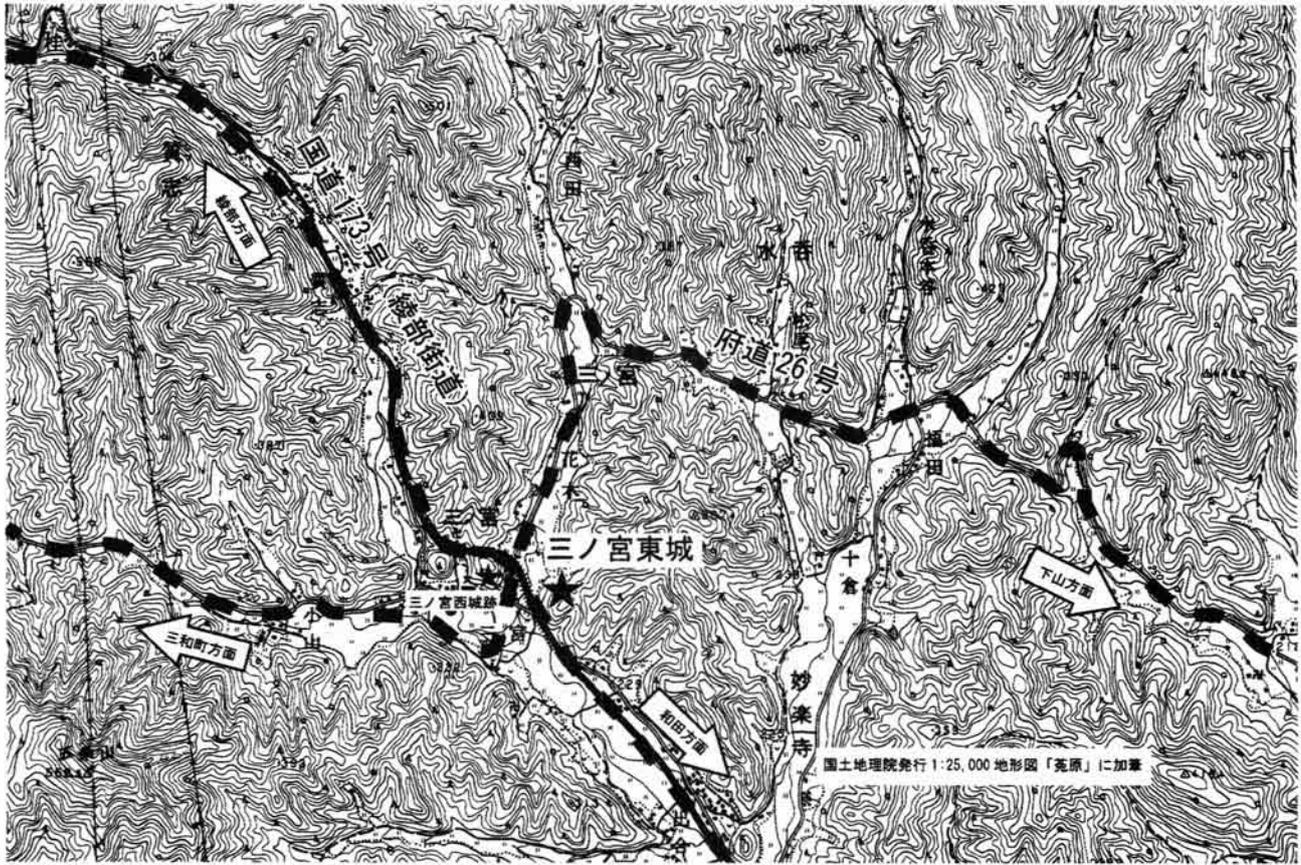
第7図 八木城主要部 (参考)



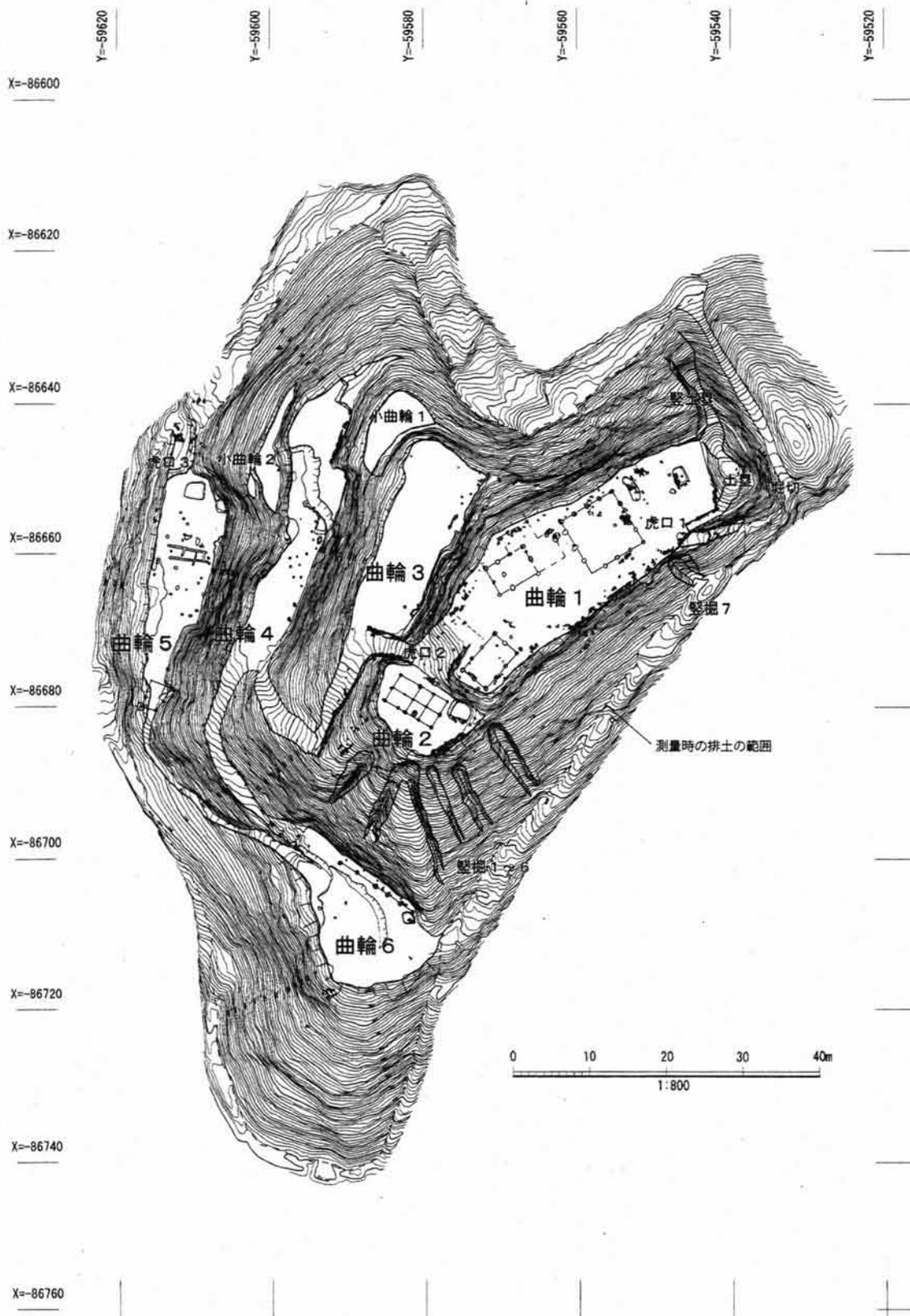
第8図 園部城跡全図（南丹市文化博物館復元図より）



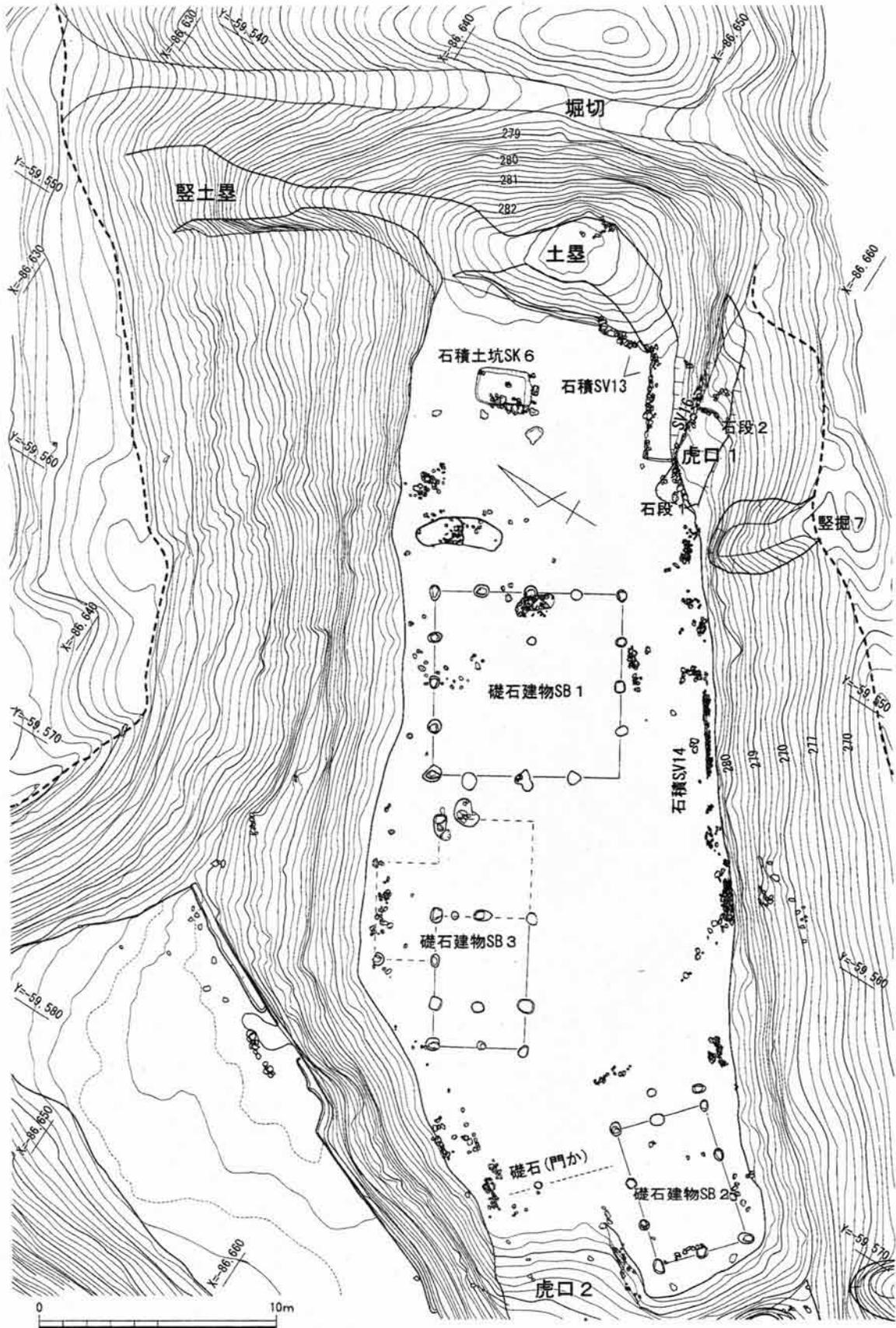
第9図 園部城跡調査地配置図および第8次調査地平面図



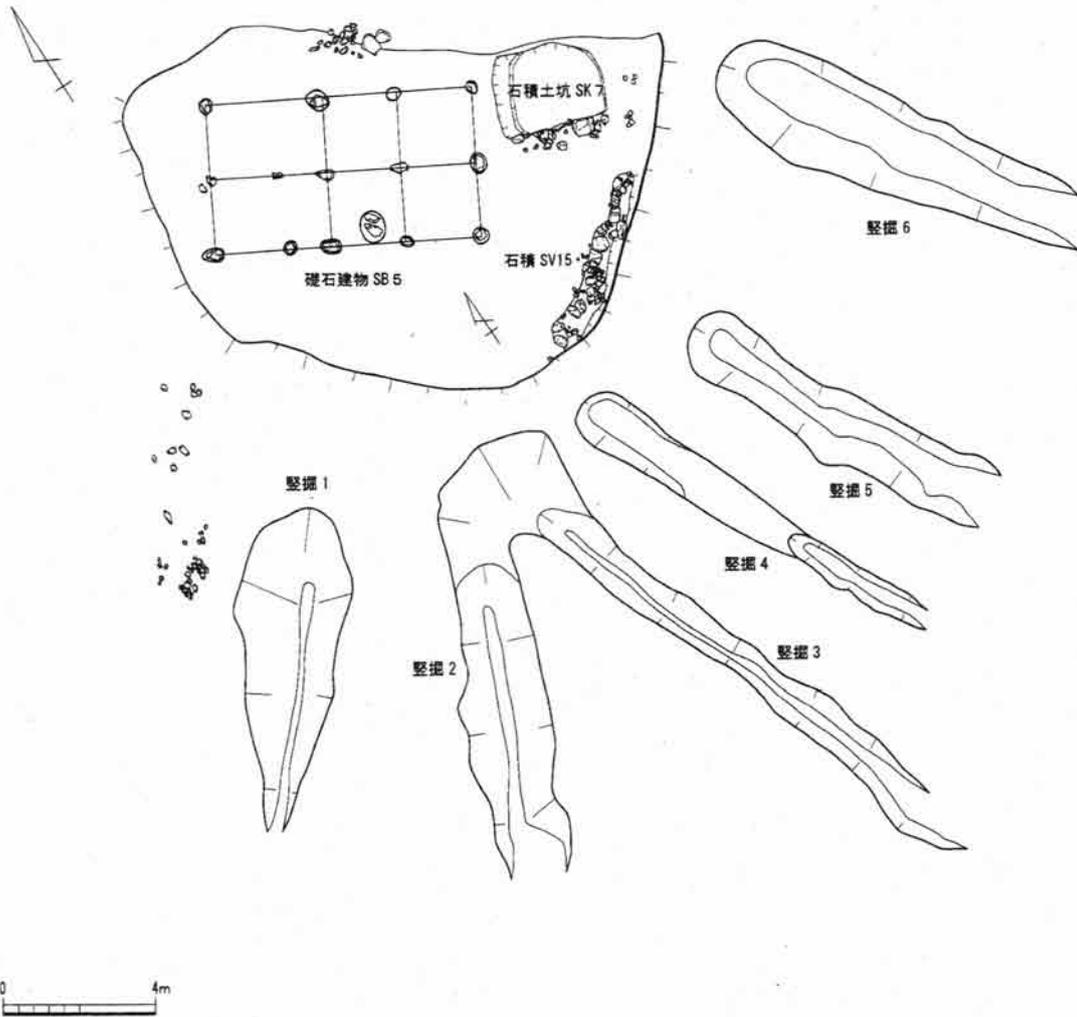
第10図 三ノ宮東城跡 周辺図



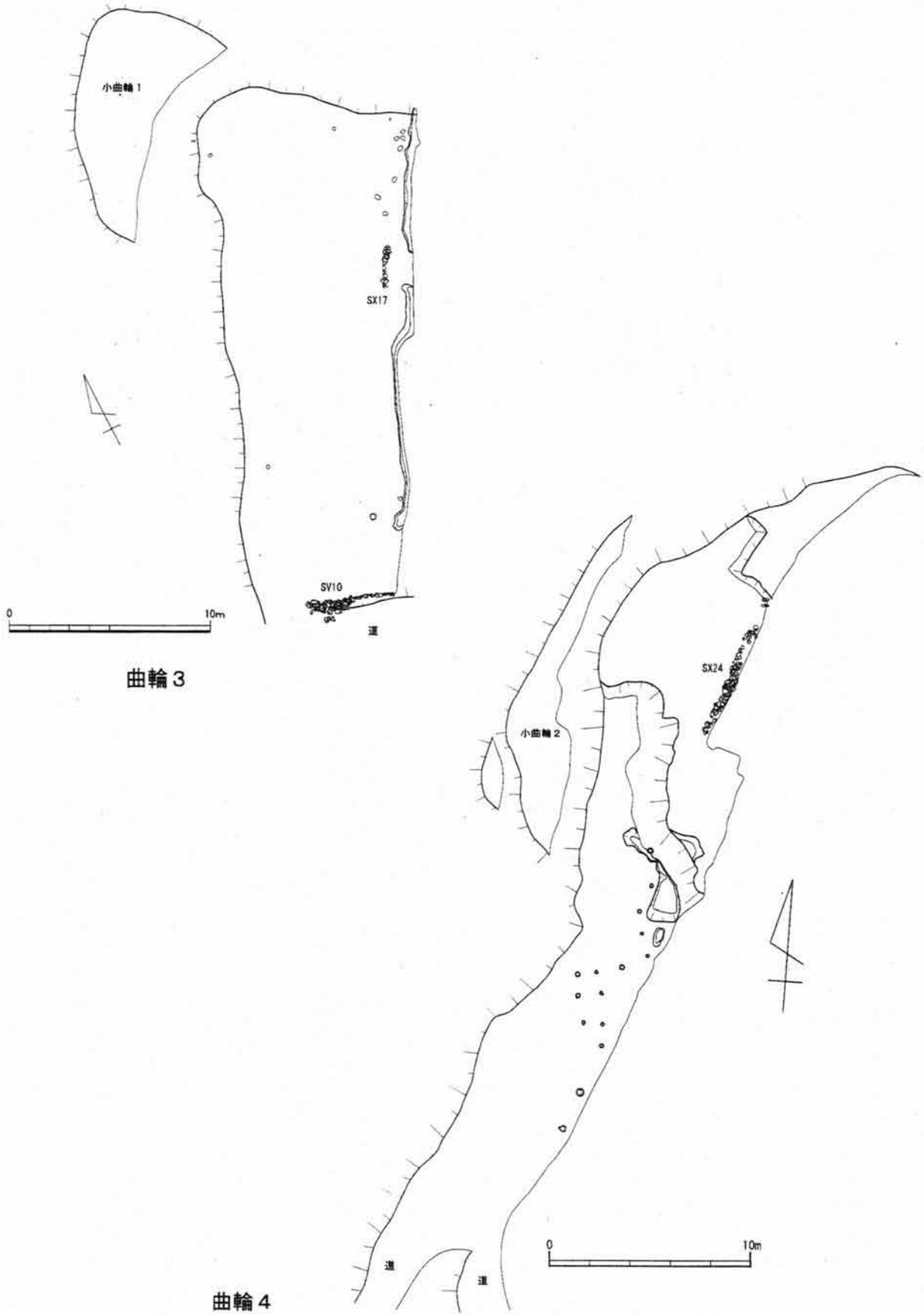
第 11 図 三ノ宮東城跡 全体図



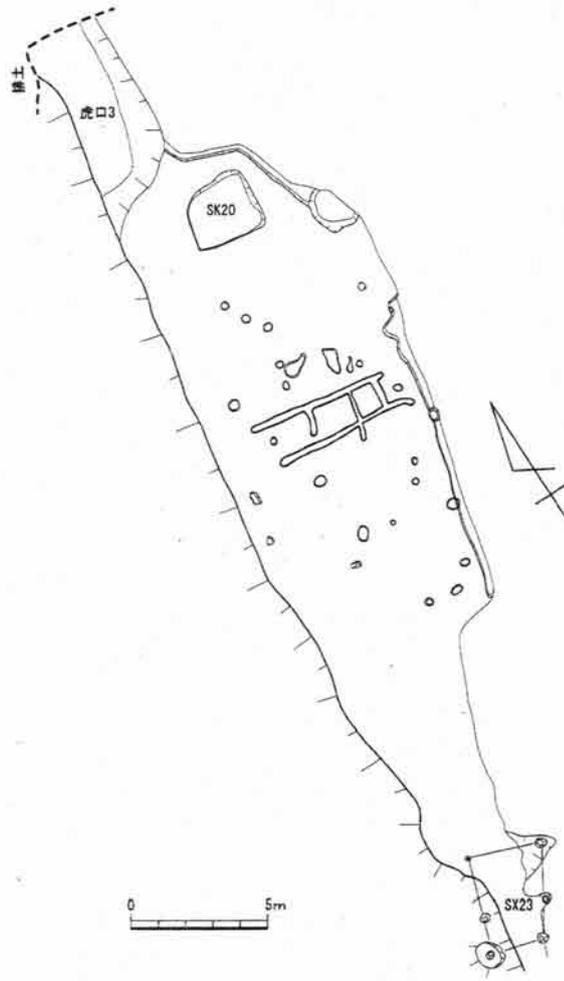
第12図 三ノ宮東城跡 曲輪1



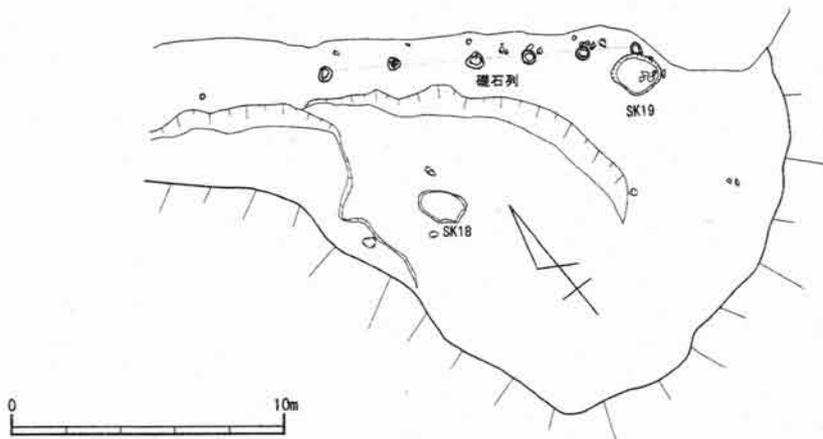
第13図 三ノ宮東城跡 曲輪 2



第14図 三ノ宮東城跡 曲輪3・4



曲輪 5



曲輪 6

第15図 三ノ宮東城跡 曲輪5・6

メモ

南丹市内の城館跡

おやまやかたあと
— 小山館跡ほかの調査から —

南丹市教育委員会

係長 辻 健二郎

1. はじめに

丹波地域の戦国時代は、丹波守護細川氏の動向と密接に関係があり、管領の地位にあった細川政元から高国、晴元そして三好政権を経て、織田信長による丹波攻略へと進んでいきます。こうした中で、丹波には3つの大きな城跡が見られ、それらと共に多くの山城が確認されています。

八木城 八木城は、南丹市八木町と亀岡市にまたがる標高 330 m の城山の山頂に築かれた堅固な山城です。城跡の東には大堰川（桂川）が南流し、麓には細川勝元が建立したと伝えられる龍興寺が見られるなど丹波守護代である内藤氏の居城として、丹波守護である細川氏と繋がりが深い地域です。京街道（山陰道）を眼下に望む口丹波随一の要害で、丹波国における重要拠点の一つでした。戦国末期、織田信長の丹波攻略によって天正 7（1579）年頃に落城したと伝えられます。キリシタン武将である内藤如安の生誕地でもあります。

八上城 八上城は、篠山市八上にある標高 459 m の急峻な高城山に築かれた山城で、山頂からは多紀郡内を見とることができます。波多野氏の居城で多紀郡で自立し戦国大名化を図るが三好政権による丹波支配などの影響により、その発展を阻まれました。織田信長の丹波攻略によって天正 6（1578）年 9 月に包囲され、籠城は凄惨を極めたと伝えられます。天正 7（1579）年 6 月に落城、波多野氏は滅亡しました。

黒井城 黒井城は、兵庫県丹波市春日町（旧氷上郡）に位置し、標高 356 m の猪ノ口山全山を要塞化した山城です。黒井城の歴史は赤松貞範が丹波国氷上郡春日部荘を与えられ築城したことに始まります。その後は荻野氏が在城し、天文 23（1554）年に荻野直正が入城して以後、氷上郡のほか天田郡、何鹿郡と船井郡の一部を制し、丹後、但馬にも進出しました。明智光秀による進軍を天正 4（1576）年に波多野氏と連合することで、一度は撃退しますが、天正 6（1578）年に直正が病死。その間、明智光秀は龜山城の惣堀を設けるなど、丹波攻略への拠点作りを進めており、天正 7 年（1579）8 月に光秀軍の攻撃により落城します。その後、光秀の重臣である齊藤利三が城主となり石垣を持つ城郭に改修して

います。3代将軍家光の乳母である春日局の生誕地でもあります。

宇津城 宇津城（京都市）は、旧北桑田郡京北町にある城跡で、宇津氏は、北桑田郡の山国莊や弓削莊だけでなく、園部や八木の地域まで勢力を拡大していた在地領主です。

天正3（1575）年、織田信長は、内藤・宇津を討伐するために小島・川勝・並河氏らに光秀出陣を伝え要請しています。宇津城は天正7（1579）年頃に落城したと伝えられ、落城後、光秀は縄野村に城を築き、村の名称を周山と改めました。

蟠根寺城 蟠根寺城は、南丹市園部町高屋にある城跡で、蟠根寺の背後に築かれている山城です。主郭を中心に尾根上に曲輪が配置されており、蟠川城とも呼ばれています。室町幕府政所代を務めた蟠川氏の居城といわれ、蟠川氏の当主は代々新右衛門と名乗っていました。城下は桐野河内と呼ばれる幕府御料所で、応仁の乱以後、幕府の守護統制が事実上停止した中で京都近郊に残る御料所として重要な位置を占めました。永禄6（1563）年、主家である伊勢貞孝・貞良父子が三好氏と戦い討ち死にし、永禄8（1565）年には13代将軍足利義輝が松永久秀等に討ち取られるなど蟠川氏の周辺は慌しくなり、蟠川親世・親長は蟠根寺城を去ったといわれています。親長は土佐国の長曾我部元親を頼り、その家臣となりました。織田信長の丹波攻略後、明智光秀の家臣として伊勢貞興の名前があり、山崎の合戦で討ち死にしています。蟠根寺城に留まっていたといわれる蟠川貞周・貞房父子も山崎の合戦で討ち死にしたと伝えられます。

このほかにも、明智光秀による丹波攻略によって落城したと伝えられる城跡が多く存在します。園部町木崎町にあったと伝えられる善願寺も焼き討ちにあったと伝えられ、現在も善願寺城跡の西側を流れる川を陣田川といいます。また、徳雲寺谷には、腹切り峠という名前の峠があります。現在では、ほとんど人の往来もない峠ですが、この名前がついた背景には以下のような伝承があります。

『八木城主であった内藤備前守が落城と共に城を脱出し、北へ落ち延びてきて徳雲寺谷までやってきた。しかし、ここにも敵の手がまわっており、命運尽きた内藤備前守は、ここで切腹して果てたという。それを不憫に思った地元の莊林氏が五輪塔を建て菩提を弔ったという。』

このように丹波に地域には明智光秀による丹波攻略にまつわる伝承があちこちに残ります。徳雲寺谷の北東に位置する小山館跡は、この地域の在地勢力であった莊林氏の城館跡であると考えられます。

2. 小山館跡の調査成果

調査地は、南丹市園部町小山東町に位置しており、東には園部川が南流しています。城館跡は、山城のある五合山から西に派生する丘陵の先端に位置しています。館跡は土塁と堀に囲まれた南北38m、東西12mの長方形をした平坦部を「コ」字形に囲むように構成されており、南北70m、東西30mの規模をもちます。

調査地は竹の根が広がる表土の下層に黄褐色の地山があり、この土層を穿ち堀を掘削し、その土で土塁を構築していたものと思われます。

遺物は土師器や陶磁器などが見られますが遺物の量は非常に少ないです。遺物の中には古墳時代の須恵器や埴輪も見られます。

土塁 館内部を「コ」字形に囲む土塁で、東西方向の北側土塁と南北方向の西側土塁を調査しました。東西方向の北側土塁は、調査地の北東部分で館内部の平坦部と高さを同一にしています。また西側土塁の幅は9.0mあり、館内部からの高さは3.5mを測ります。東西の幅は8.0mで、堀底は平坦になっており2.0mの幅を持ち、逆台形を呈します。

館内部 単郭の長方形を呈する館内部の北側約300㎡を調査しました。この部分には西側と北側に土塁が巡っており、調査の結果西側の土塁と北側の土塁に添うように溝跡が検出されました。溝跡は幅40cm、深さ15cmを測り、平坦部の排水機能を有していたと思われます。

その他、ピットを検出しましたが、調査区内においては、建物に復元できるような状況にはありませんでした。

小山館跡のまとめ

この館跡は、東側の切り立った崖面を有効に使い、西面に深い空堀と土塁を設けることで高い防御性を備えています。南丹市の園部町域は丹波守護代の内藤氏と篠山盆地を本拠地とした波多野氏の勢力が拮抗した位置にあり、こうした位置関係から防御の意識の高い館跡が築かれたと考えられます。

3. 宍人城とその周辺

宍人城は、南丹市園部町宍人にある城跡で、北野社領の船井莊の莊官であった小畠氏の居城です。織田信長の丹波攻略に際しては、丹波攻略の拠点となる亀山城の惣堀の整備を行うなど、明智光秀に協力しました。八上城攻めに際しては、「付け城」の統括を行っていましたが、当主の小畠越前守が討ち死にし、家督相続に際して明智光秀が明智姓を与えるなど、光秀は小畠氏を非常に重視し、厚遇していた様子が見えます。

江戸時代に入り、小出氏が園部に3万石で移封されると在地の有力者であった小畠氏を

頼り、園部陣屋^{じんや}が築かれるまでの間、仮館を造り在庁したといわれています。

小島氏は光秀にとって非常に重要な在地領主^{ざいちりょうしゅ}であり、丹波攻略の上でも最も重要な家臣でありました。その影響は広大な面積を占める居城にもよく現れています。

現在、宍人には標高 330 m の古城山に山城があり、ここは、詰城^{つめのしろ}として機能していたものと思われます。この山城の麓、標高 170 m 付近には 3 つの曲輪^{くるわ}からなる小島氏の居館跡^{きよかんあと}があります。館跡^{しゅかく}の主郭部分は、東側を急峻な崖面で自然地形を巧みに利用した構えとし、北側は大きな堀切^{ほりきり}をもちます。東には曲輪^{くるわ}を設け、堀や土塁を配し、南には雛壇^{ひなだんじょう}状に曲輪を配置しています。また、主郭の南東部分には櫓台^{やぐらだい}の痕跡が見られます。

こうした小島氏の居館遺構の北東にも館跡^{やかたあと}が確認されます。この遺構は、小出氏が元和 5 (1619) 年、当時に臨時に築いたものと思われ、北西・南東・北東に櫓台が見られます。館の周囲には土塁と堀が巡りますが、堀の幅は狭く浅いものです。戦国時代を生き抜いてきた小島氏の居館と比べると防御面に大きな違いが見られます。

4. 屋敷内部の構造

園部藩の資料として「江戸雉子橋御屋敷ノ図」という絵図^{えず}が伝わっています。これはそのべはんえどはんてい^{そのべはんえどはんてい} 園部藩江戸藩邸^{かみやしき}の上屋敷の絵図です。

園部藩のみならず、全国の藩の政治組織、機構のあり方は基本的には国元^{くにもと}と江戸に二分されてきました。これは参勤交代^{さんきんこうたいせい}制により全国の諸大名が江戸に藩邸^{はんてい}を構えたためです。藩邸は上中下に分けられ、このうち上屋敷は藩の公邸として使用され、参勤交代で江戸にやってくる藩主の住まいとして使用されていました。中屋敷^{なかやしき}は、隠居した藩主や世子とその家族の住まいとして使われ、下屋敷^{しもやしき}は別荘として用いられました。

園部藩の江戸上屋敷の表門は長屋門^{ながやもん}です。御殿^{ごてん}は、表（表向き）と奥（奥向き）に区分されます。

表は大きく「表御殿」「中奥」「台所」「役所」に分けられます。表御殿は玄関、書院、小書院^{こしょいん}で構成されます。式台^{しきだい}は藩主の駕籠^{かご}をつける場所です。玄関の東には使者の間があり、「溜之間」が上級藩士の控え室で、江戸詰家老^{えどつめがろう}は「家老詰所」を控え室とします。「書院」は藩主が家臣と対面する場所です。「小書院」は幕府や藩の重役、藩主の親類などの対面、接客のために使われます。中奥は、居間、寝間であり、藩主の日常生活と執務室を兼ねます。台所の西側には役所が設置され、ここで藩士が事務を行っていました。

奥は、藩主の妻子の住居である「奥御殿」と奥に勤める御殿女中たちの住居である「長局」とに分けられます。

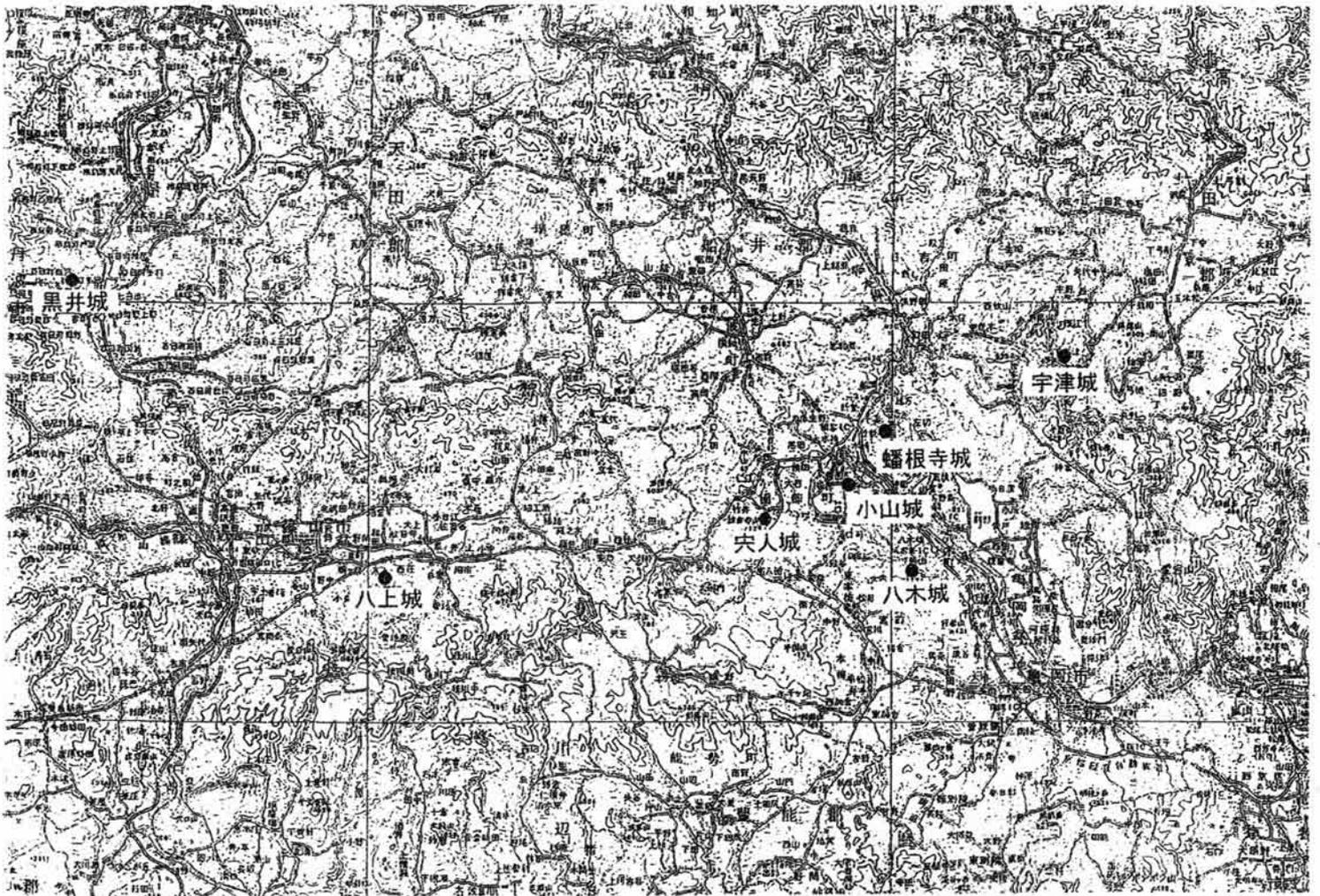


図1 主要城館跡位置図

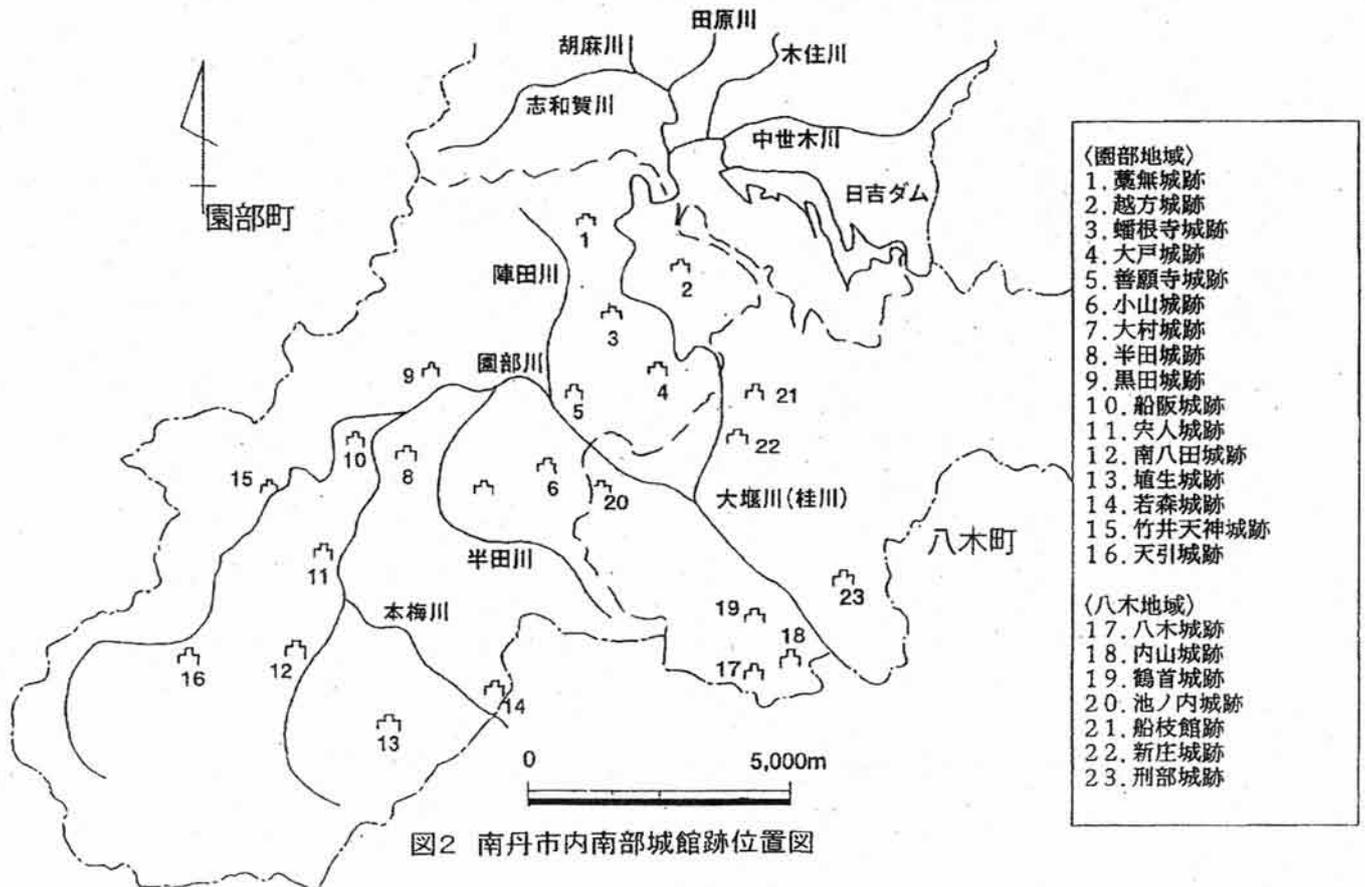


図2 南丹市内南部城館跡位置図



图3 小山城跡位置图

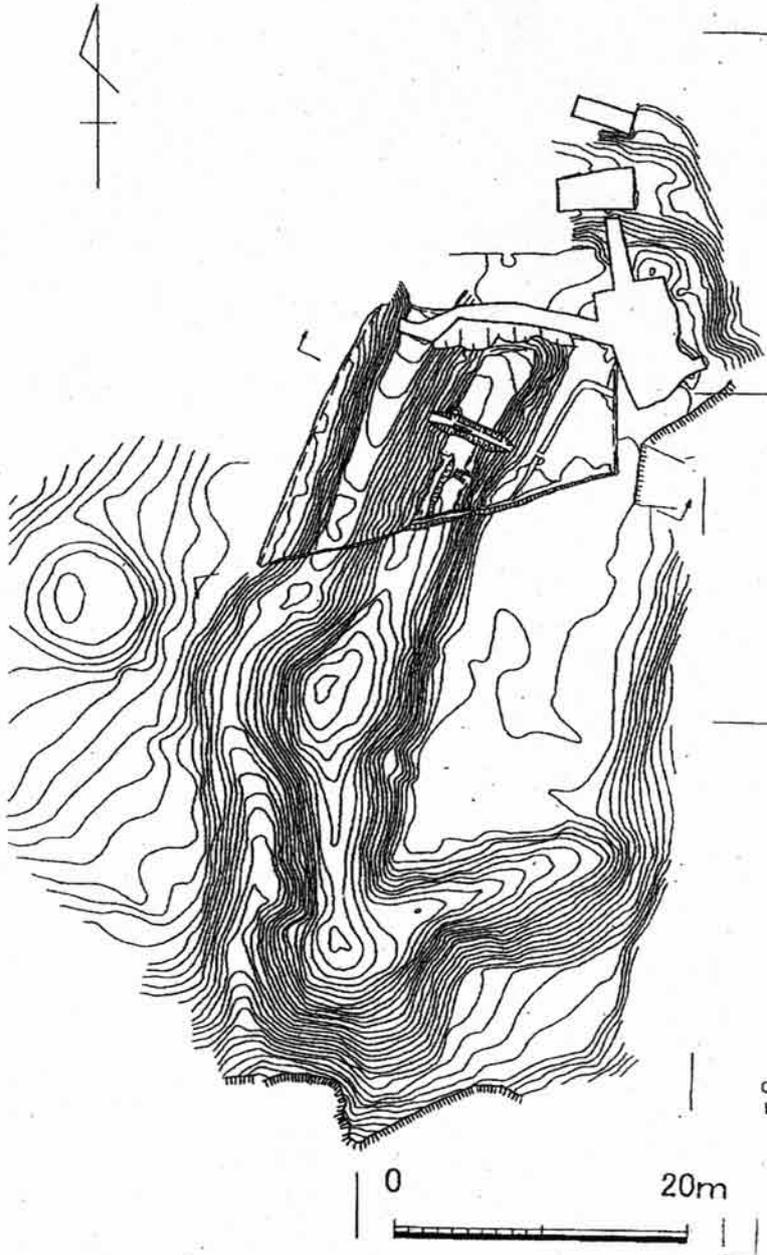


图4 小山館跡測量图

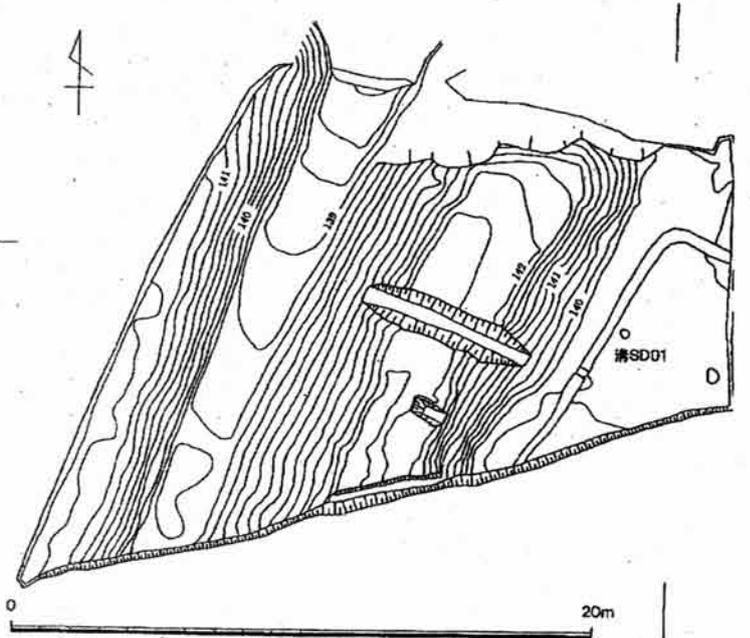


图5 小山館平面区

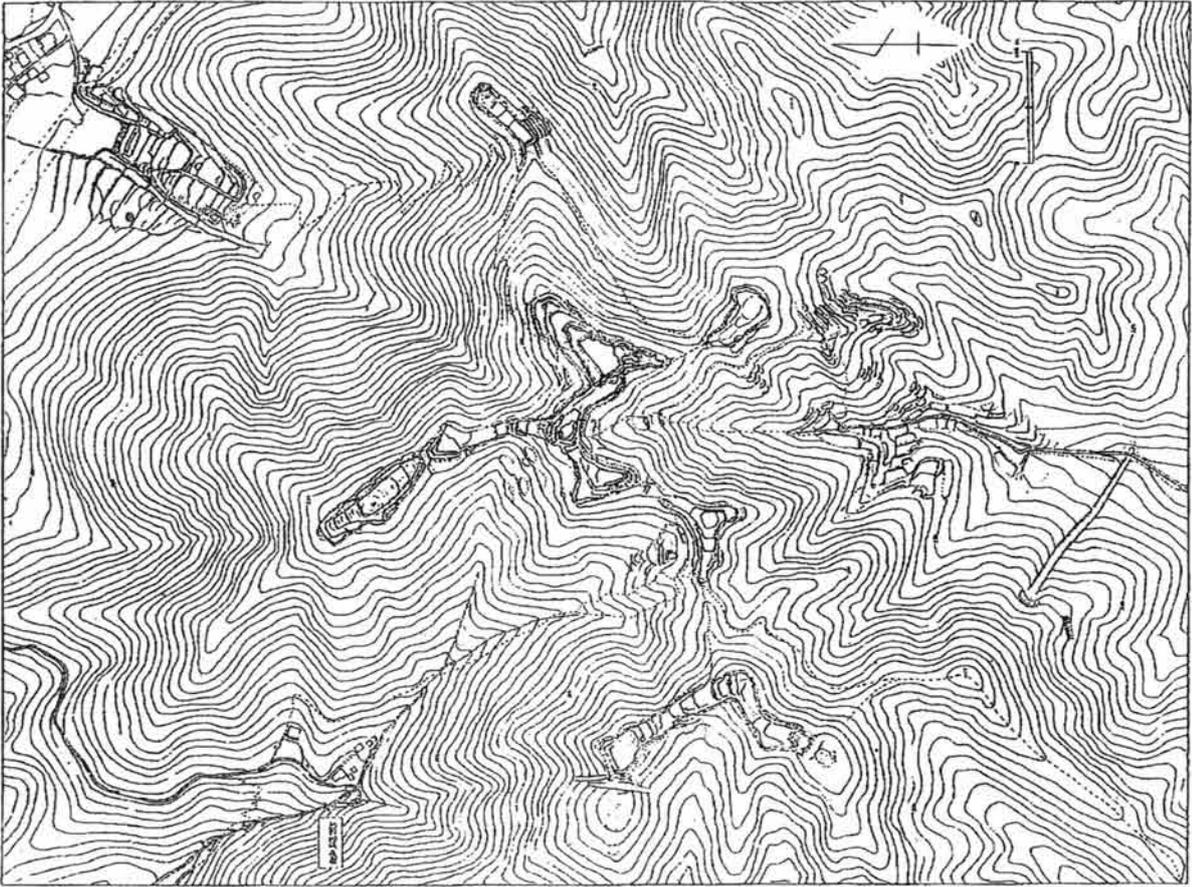


図6 八木城跡縄張図(『丹波動乱』日吉町郷土資料館から転載)

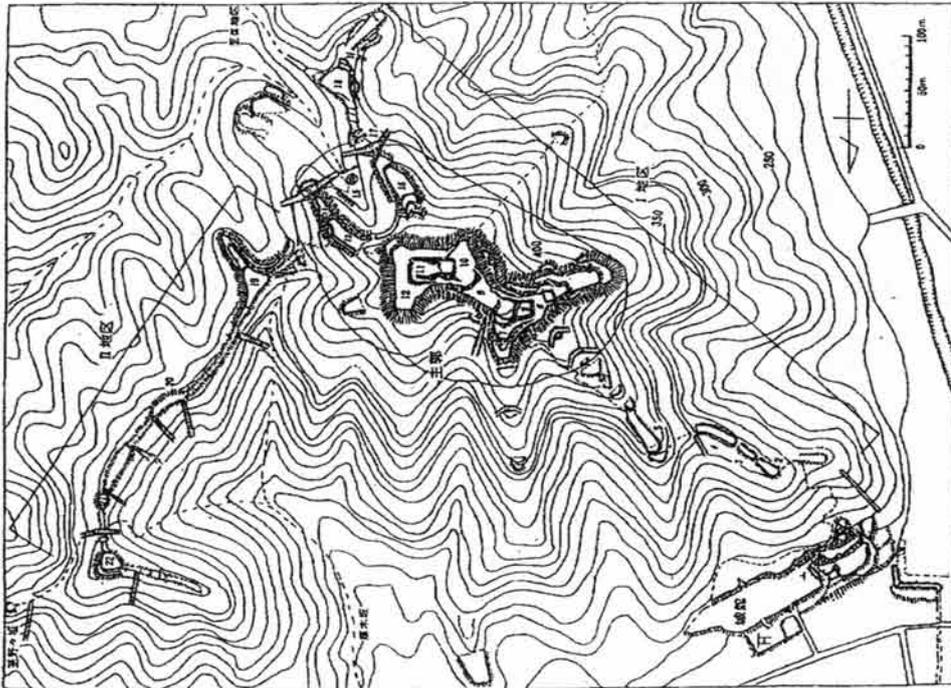
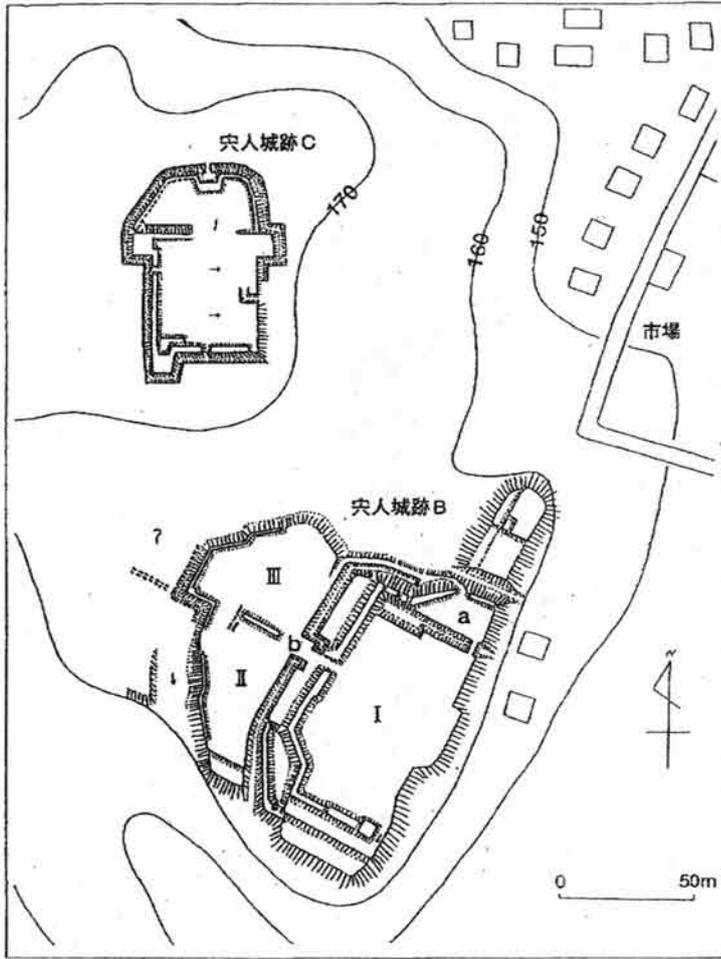
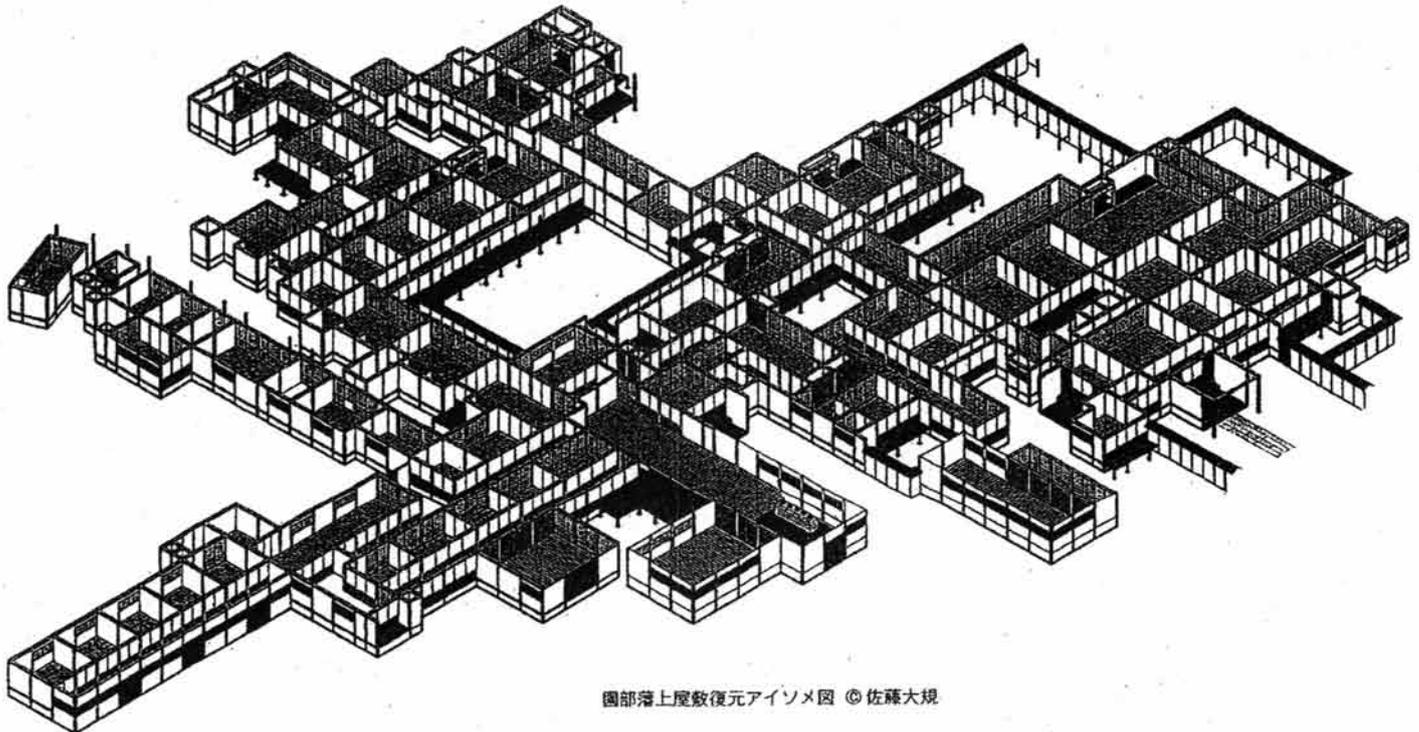


図7 八上城跡縄張図(『戦国・織豊期城郭論』八上城研究会から転載)



穴人城跡A~C位置図

図8 穴人城跡縄張図(『図録 園部の歴史』園部町から転載)



園部藩上屋敷復元アイソメ図 © 佐藤大規

図9 園部藩上屋敷復元図(『南丹市文化財調査報告 平成20年度』から転載)

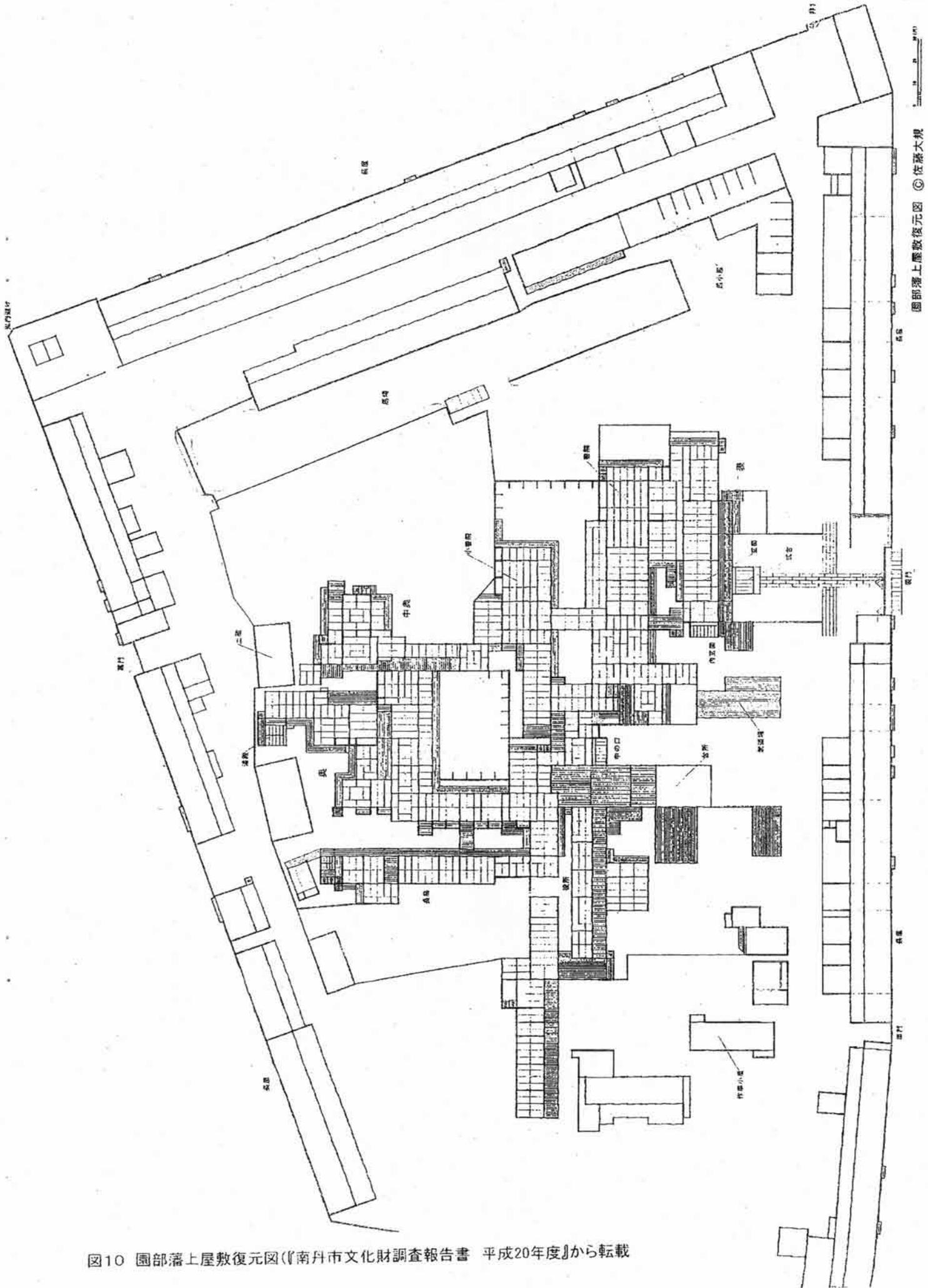
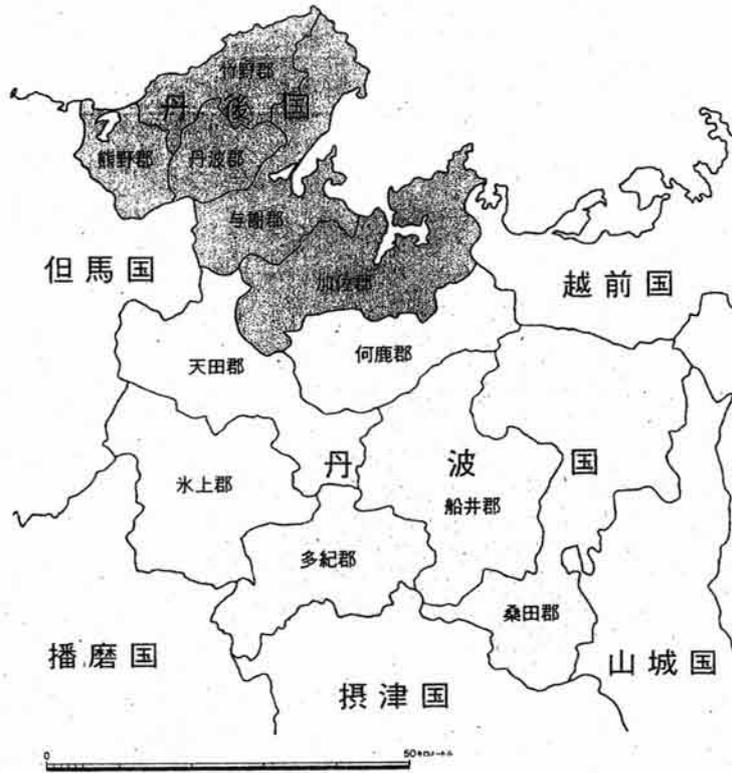


図10 園部藩上屋敷復元図(『南丹市文化財調査報告書 平成20年度』から転載)



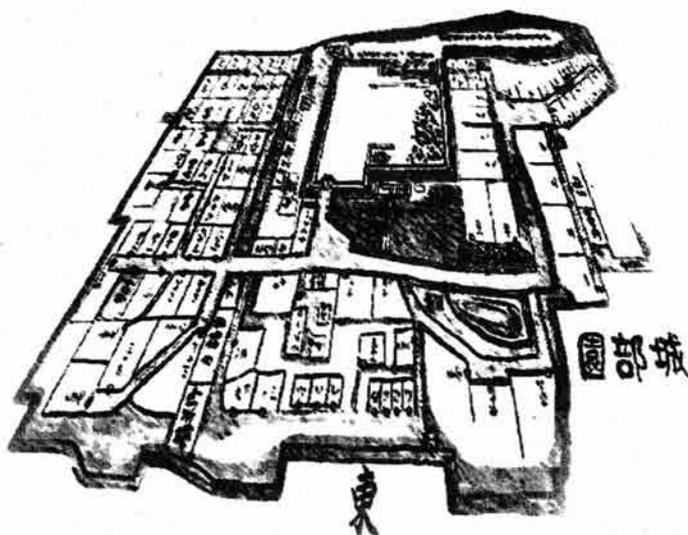
丹波国・丹後国の郡のようす
 律令制下の丹波国は、11ヶ郡を統括したが、加佐郡以下の5郡は、和同6年(713)に分割されて丹後国となった。丹波国は長岡京・平安京が営まれることにより重要性が増した。



図11 南丹市位置図



KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER



園部城絵図

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターの現地説明会や埋蔵文化財セミナー、小さな展覧会などの催し物は、下記のホームページでもご案内しています。

<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3

Tel (075) 933-3877 (代表) Fax (075) 922-1189